
姉上様の謀略

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉上様の謀略

【Nコード】

N3828Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

唯一の肉親である弟は幼いころ、王子に顔が似ているからというだけで影武者として城に連れて行かれた。残された姉は泣き寝入りするしかない、と思いきや……「見てなさい王子、今に吠え面かかせてやるわ!」 いつの間にか地位も能力も最強になっていた姉が、なんか不憫な王子を怒鳴り散らす話。

1・1 姉上様はかく語る

国というのは、厄介なものだ。

シアンは溜息を一つつくと、馬車の窓から外の景色を見渡した。ここには、今まで暮らしていた田舎とはまるで比べものにならないほど、人も物も多い。

彼女は長いまつげを数回しばたかせると、その景色をしっかりとその瞳に焼き付けた。目線を上げるとそびえ立つのは、大きな城。僅かに瞳を細め、彼女はそれを睨むように見上げる。

自分が魔術師であると気付いたのは、10を数えた時だった。何気なく貸本屋で借りた魔術書を読んでみたところすらと理解でき、ついでに簡単な魔法陣を描いてみたところ、いとも簡単に魔術を使うことができた。魔術書の文字は魔力のあるごく一部の者にしか読むことはできず、さらに魔法陣は、形を知っていても文字を描くの に用いる媒体、たとえばチョークや、指先なんかは魔力を乗せることができなかった、永遠に発動しない。

魔力を持って生まれてくることですら珍しいのに、それをすぐに使いこなすことができる者など、片手でも多すぎるくらいに少ないのだ。――つまるところ、シアンは天賦の才に恵まれた子だった。

それからは、死に物狂いで勉強をした。本を読み漁って、魔の森で修業をして、効果があると聞けば滝にも打たれた。その成果か、18になるころにはその名を国中に轟かせるほどの魔術師になり、ついに国からの要請も受けた。国同士直接の争いはもう何十年も起きていないが、それでも暗殺や謀略のはびこる世である。特に『先読みの力』に長けたシアンのことを欲しがっているのは、この国だけではない。牽制し合ってギリギリ均衡を保っている今、『先読みの力』はどんな剣にも代えがたい力なのだ。

実際シアンも何度か追手に出会ったことがあるが、先読みのでき

る彼女にとって、その追跡をかわすことは造作もなかった。そうして今日、シアンはこの国お抱えの魔術師となる。

「ふふ……やったわ、ついにやったわ。……見てなさい、王子」

シアンは王からの文を賜ったその日、透き通るような緑色の瞳にほの暗い喜びを滲ませていたのだった。

「魔術師様、到着致しますのでご用意をお願い致します」

「――わかりました」

従者の声に答え、彼女はフードを被る。

すぐに扉が開かれ、外へ降りる。整然とした石畳が敷かれ、左右に多くの兵が立ち並んでいる。

「すげー、あれが『先読みの魔女』か？ まだ子供じゃねーか」

「魔術師だからな、歳ぐらいごまかしてるかもしれないぞ」

ひそひそと兵士の話す声が耳に届く。シアンが少しだけ顔を上げると、ぱちりと目が合ってしまった。

「あ、いえ、なんでもございませ、あっ！」

青ざめてそう弁解した兵士が手にしていた護衛用の槍を、石畳の上に落とした。金属のぶつかる高い音が響き渡る。

「おい、なにやってんだよ！」

「う、すみませ……」

シアンは慌てる兵士にゆっくり近寄ると、従者の止めるのも聞かずその槍をそっと拾い上げた。

「あ……」

「ふふ、そんなに慌てないでください。どうぞ」

シアンはにっこりと微笑んで、兵士の手に槍を戻した。

「あ、ありがとうございます……」

「いいえ」

翠の瞳がふわりと細められ、フードの間から金髪がさらりとこぼれる。

摘みたての花のようなその笑みに、声を掛けられた本人だけでなく、周りの兵士たちもが目を見開いて硬直した。

シアンは従者の後ろに戻って、それから思い出したようにくるりと振り返った。

「そうそう、言い忘れていましたけれど、私この前18になったばかりですよ?」

悪戯っぽくふふ、と笑うシアンを見て、兵士たちは初心な乙女のように頬を染め上げたのだった。

「魔術師様、こちらへどうぞ」

シアンは無言のまま後に続いた。

城の中は煌びやかで、靴で踏んでいる赤い絨毯は明らかにシアンの部屋の毛布よりも上等だ。毎日あれにくるまって寝ていた自分がとんでもなく滑稽に思えてくるが、そうではない。ここの奴らがかしいのだ。

シアンには弟がいた。弟のデイスはやんちゃだが優しい子で、幼くして両親を失った2人はとても仲が良かった。一緒におままごともしたし、追いかけてこもした。かくれんぼで自分のことを見つけられず、泣き始めてしまったことはしばらく弟をからかうときの種になっていた。多くの一般国民がそうであるように、自分と弟も王族に関わることなど当然ないと、その頃のシアンは思っていた。

国から使いが来たのは、シアンが6つ、デイスが4つの時だった。デイスは初めて間近で見る騎士たちに興味津々だったが、シアンはなぜだか不安でたまらなかった。もしかすると昔から勘の利く方だったし、この頃から無意識に先読みの能力が使っていたのかもしれない。

使いの言うには、デイスをこの国の王子、クリスヴィン・アレリックの影武者として城に迎えたいということだった。年の頃も背丈も外見も似通っていて、親もいない孤児院育ちのデイスは、影武者

の条件にぴたりと当てはまってしまった。

城ではもうデイスが迎えられることは、ほとんど決定事項だった。シアンがどんなに泣いても喚いても決定が覆ることはなく、弟は数日の後城へと連れて行かれた。

「ねーちゃん、おれ城でもがんばるから、ねーちゃんも泣くなよ？
てがみかくからさ！」

そう笑って言ったデイスの姿を忘れたことは、ただの1度もない。

王子の影武者と言うのはずっと昔から続いているもので、王子がまだ幼い時だけ、代わりとして影武者が人前に出る。しかし1度影武者として城に入ったものは、重要機密を知ることになるため、役割の終わった後も生涯城から出ることは許されない。孤児院はデイスのおかげで潤ったし、シアンも勉強に励むことができたが、ちっとも嬉しくは無かった。

弟に会いたかった。自分とよく似た顔立ちが、屈託なく笑う姿を見たかった。大きくなった弟のことを、どうしても一目見たかった。「どうして、私が遠慮しなきゃいけないのよ。何が一目会いたいよ、ふざけんなっての。姉が弟に会うのに理由なんているか！ 一目も二目も会わせろ！」

そう叫んだ瞬間、彼女は閃いた。そうか、弟が出られないのなら、私が行けばいいんだ。

そこからは人の変わったように勉強し、偶然手にした魔術書を読みふけり、彼女は歴史に名を残そうかというほどの大魔術師になったのだ。

1・2 姉上様はかく語る

「クリスヴィン王子、魔術師様にご到着なさいました」

荘厳な扉の前、使いが大きな声で彼女の来訪を伝える。

「入れ」

低くよく通る声が、部屋の中から響いた。――王子だ。

「失礼いたします」

使いの後に続いて、部屋に入る。謁見の間にはピンと張りつめた空気が漂っていた。シアンは顔を伏せたまま王子の御前まで歩き、無言のまま両膝をつく。問われていないのに勝手に話すことは、王族に対して失礼にあたるからだ。シアンは叩きこんだ礼儀を尽くして、王子の顔を見たいと逸る心を押さえた。

「魔術師殿、長旅ご苦労だった。どうぞ顔を上げて楽にしてくれ」王子の声が頭上に降ってくる。シアンは出来るだけ恭しくフードを取り、エメラルドの瞳を露わにした。

ほう、と謁見の間に、護衛やメイドたちの感嘆の息が漏らされた。シアンは普段魔術師らしくその容姿を簡単に晒したりはしないが、その姿を見たものはみな口を揃えて、女神のごとき美しさであった、と彼女を語るのだった。

これからは好きなだけ、王子の顔を拝むこともできるのだ。シアンはすぐに王子の顔を眺めるような無礼な真似はせず、瞳を伏せたままに薄く笑みを浮かべた。

「有難きお言葉頂戴致します。白の魔術師、シアン・ミストラルと申します。この度は王子殿下直々の……」

シアンが口上を述べようとしたとき、王子のすぐ後ろに控えていた一人の騎士が首を傾げた。

「姉ちゃん……?」

きょとんとこちらを見つめるヘーゼルの瞳と目が合うと、シアンは一度大きく目を見開いたが、あくまで落ち着いた様子を装い笑っ

た。

「――久しぶりね、デイス」

「姉ちゃん、やっぱ姉ちゃんだろ！？　うわー、何してんだよこんなとこまで来て！」

デイスは昔のままの懐っこい笑顔を輝かせ、シアンに駆け寄った。
「悪い、みんな下がってもらえるか。この人は俺の姉だ、王子に害なすような真似はしない。俺が責任を持つ」

デイスは控えている騎士たちにそう声を掛けた。

城へ上がるというシアンの計画は面白いほど思い通りに進んだが、ただ1つ想定外だったのは弟が騎士、それもかなり位の高い、王子付きの護衛騎士になったことだった。

通常影武者として城に迎えられたものは、一生をほぼ幽閉される形で終える。贅の限りを尽くす代わりに、自由を奪われて死んで行くのだ。

しかしデイスは、影武者時代に学んだ剣術が思いのほか成果を出し、年若くして教師を打ち負かしてしまうほどの腕前を見せた上、12の時には御前試合で優勝してしまった。影武者が御前試合に出ることさえ異例の事態だったが、成長とともに運良く顔立ちも背丈も王子とは離れていったため、特別にある程度の自由が認められたのだという。

影武者の存在を知っている一部の者たちはデイスの扱いに悩んだが、間違いなく腕が立ち、その上国の機密事項を知ってしまったている彼である。下手に扱うくらいなら騎士として城に縛り付けておいた方が安心だと思ったのだろう、デイスは史上最年少にして王子付きの護衛騎士という、人に言わせると大変名誉な役職を賜ったのであった。

デイスの言葉を聞きどうするべきかとうろたえる騎士たちに、クリスヴェインが『いい、下がれ』と命令した。騎士たちは短く返事を

し、メイドも頭を垂れると、美しく列を成し謁見の間を後にした。
ギィ、と重苦しい音を立て、扉が閉められる。それを確認すると、
シアンは顔を綻ばせた。

「デイス、久しぶりね！　もう、こんなに大きくなっちゃって！」
昔の面持ちを残しながらもすっかり大人びてしまったデイスを見て、
膝をついたままシアンは王子のことなどそちのけで言う。

「姉ちゃんもすっかり女らしくなっちゃって、っていうか先読みの
魔術師って姉ちゃんのことだったの！？　教えてくれればよかった
のに」

「ふふ、驚かせたかったの」

デイスは手を取ってシアンを立ち上がらせると、思い切り抱擁を
交わした。12年間手紙でしか会話を交わすことはできなかったの
で、騎士らしく引きしまった腕も、自分より随分伸びてしまった身
長も、嬉しくて、切ないものに感じた。

「ほらクリス、俺のいっつも言ってる姉ちゃん！　美人だろ！？」

デイスが肩を掴んで、見せびらかすように王子に姉のことを向か
い合わせた。そこでシアンは初めて、王子の姿を目にすることがで
きた。

透き通るような金の髪に、ヘーゼルの瞳。弟とパーツは似ている
が、騎士である弟に比べると肌が白くやや細身で、どこことなく影の
ある、繊細そうな面持ちをしている。ガラス細工のようだと言で囁
かれているのも頷けると、シアンは思った。

「デイス・ミストラルの姉、シアン・ミストラルでございます。お
目にかかれて光栄です」

「――ああ、デイスからよく話は聞いていた。まさか名高い先読み
の魔女が、その姉君とは夢にも思わなかったが。デイスには世話に
なっている。魔術師殿も何か必要なものがあれば、遠慮せずに言っ
てくれ」

王座に腰掛けたまま、クリスヴィンは言った。弟の手紙にあった
ように、王子と弟は親しいらしい。

「有難きお言葉に御座います。では一つお願いしても宜しいでしょうか」

シアンが頭を垂れて言うと、王子はなんだ、と耳を傾けた。「少しばかり、殿下のお時間を頂けないでしょうか。この先の私の務めについて、いくつかお聞きしたいことがあるのですが」

シアンが言うと、王子はいささか拍子抜けしたかのように、しかしすぐにまた引き締まった表情に戻って言った。

「そんなことか、いくらでも言うがいい。デイス、ついて来てくれ。話なら私の執務室で聞こう」

王子が立ちあがって、階段を下りる。デイスの隣に並ぶと、王子の方が幾分背が低く華奢で、2人はもうあまり似ていなかった。

「こちらへ」

「行こうぜ姉ちゃん」

謁見の間を出、広すぎる廊下を静々と歩く。デイスの立ち居振る舞いは上品さ溢れるクリスヴィンのそれとは違い、あくまで騎士らしいものだった。きっと意図的にそうしているのだろう。

シアンは弟を見て、少しだけ寂しそうに笑った。

1・3 姉上様はかく語る

王子はデイスとシアンを執務室へ通すと、人払いをするように申しつけた。

机の上には大量の書類が乗せられており、壁には本が並んでいる。腰に剣を差しているし、一国の王子なのだから剣技もできるのだろうが、普段はここで机に向かっているのだろう。

「そちらへ座ってくれ。私は魔術師の礼儀などはよくわからんだ。魔術師殿も堅苦しく思わず、思うことがあれば言ってくれ」

執務室の椅子にゆったりと腰掛け、王子はシアンに促した。その横にデイスも控える。

しかしシアンは何故か返事をせず、腰掛けようとしめない。ただ突っ立ったまま、黙って下を向いていた。

「どうした？ 魔術師殿」

クリスヴィンが怪訝そうに眉をひそめる。デイスもおや、と首を傾げた。

「姉ちゃん？」

シアンは俯いて、細い肩を震わせていた。真っ白いローブの上に、金の絹糸のような髪がかかる。

「……いに………」

何かぶつぶつ呟いているが、よく聞こえない。クリスヴィンが、「おい、どこか具合でも……」

とメイドを呼ぼうとしたとき、シアンの顔が上がった。顔中に、恐いほど美しい、黒い笑みを浮かべて。

「——ついに、ついに来たわよ！ 見たか、この私の意地を！ 今日までの血の滲む努力、汗と涙と泥水の日々、全ては今日のためだわ！」

「——な、なに……？」

クリスヴィンがあまりの彼女の美貌ぶりに、ついていた頬杖を滑

らせた。デイスもぽかんと口を開けて、姉を眺めている。先ほどまでのしとやかで美しい彼女は、一体どこへ消え失せたのか。

困惑する2人をよそに、シアンは手にしていた杖をびっと王子に向けると、敬意も恭しさも消え失せた態度でのたまった。

「あんたは私の顔も知らなかったんでしょうけどね、私は初めて新年祭に行ったあの日、遠目でその顔を一目見た時から、あんたの顔を一度たりとも忘れたことは無かったわ！ 私の弟を身代わりにして生きてきたあんたのことをね！」

クリスヴィンが事態についていけず、呼吸を忘れ目を見開いている。

尚も怯まず、シアンは王子である彼にこう続けた。

「残された私がどんな気持ちで毎日過ごしてきたかわかる？ たった1人の身内がいつどうなるかもわからないのに何もできないこの気持ち、あんたに理解できるかって聞いてんのよ！ ——孤独に耐えて、必死に学んで、そして私は掴み取ったわ、自分の幸せをね！」
狂気さえ滲ませて、シアンは笑みを浮かべた。

「……………」

クリスヴィンは無表情のまま、呆けたように姉を見ている。

それまで驚いて黙っていたデイスだったが、さすがにまずいと思ったのか、ほんのり苦笑いを浮かべて口を開いた。

「ね、姉ちゃん、俺は結局死ななかったし、こうして騎士になることもできた。クリスは王子とは思えないほど俺に良くしてくれて……」

「黙りなさい！」

シアンが、がん、とすごい音を立てて杖を床に打ちつけると、デイスは『はい……』と引き下がるしかなかった。昔から姉に口喧嘩で勝てたことは、ただの1度も無かったのだ。

「デイスが死ななかったのも騎士になれたのも、全てはただの結果でしかない。偶然この子の顔があんと似なかったただけよ！ もしそうじゃなきゃ、デイスは騎士になることも許されなかった。

「そうでしょ？」

「……そうだ」

クリスヴィンは押し殺したような声で答えた。正にその通りだったからだ。

「あんたは私の弟の人生を自分のものにして、そのくせ姉である私の顔も知らず、金だけ渡せば満足するとも思ってたわけ？　ふざけないわよ！」

シアンは蛇でも睨み殺しそうなほどの視線でクリスヴィンを見据える。

弟が自分の運命を今や受け入れていることは知っていた。そんなものじゃないのだ、この怒りは。

「歴史的に続いてきたことだか知らないけどね、そんなの私には関係ない、その時代でそうなった人が、勝手に怒ればいい！　私は今、この制度がどうか弟のためとかじゃなく、私があんたにムカついたから怒ってんのよ！　仮にもあたしの弟を身代わりにしようっていうんなら、三つ指について挨拶に来んのが姉への礼儀ってものでしょうが！」

もはやクリスヴィンもデイスも、何も言わずに固まっているだけだった。シアンはふん、と鼻を鳴らすと腕を組んで一転、睨まれただけで凍りついてしまいそうなほど冷やかな表情になり、クリスヴィンを見下ろす。

「私のこと、不敬罪にでもなんでもするがいいわ。まあ、あんたの個人的なプライドが傷つけられることと、『先読みの魔女』を失うこと、どちらがより痛手になるか考えてみるのね。——デイスに何かしてみなさい。この城一つくらい飛ばすのなんて、私には造作もないことよ」

最後だけまた恐ろしく眉を歪めて、置物のように黙っているクリスヴィンを睨みつけた。

——一度この男に怒鳴ってやらねば気が済まなかった。城へ上がるだけならばメイド試験に合格すればよかったが、こいつの下に使

えてへこへこするなんてまっぴらごめんだ。相手が王子だとかそんなものは関係ない。これは姉としての、シアン・ミストラルという人間としての意地なのだ。

だからわざわざ、向こうから頭を下げて自分を招待せねばならなくなるほど力を付けた。決して楽な道ではなかったが、彼女はついにやり遂げたのだ。先読みの魔女の名は、それほどの価値がある。

ただ、シアンの得意とする魔術は白の領域なので、城1つ飛ばすほどの攻撃魔法が本当に使えるかというところである。つまり、最後の台詞に関してはただのハッタリだったのだが。

「お、おい待て、話は……」

つかつかと出口へ向かいドアノブへ手を掛けた時に、戸惑ったままのクリスヴィンが声を掛けてきた。シアンは振り返って——その顔は、地獄の門番も泣いてしまうほど恐ろしく、そして美しいものであった。

「私に用があるなら、あんたが私に尋ねてきなさい。——このもし」

ぎり、と鋭い視線を残し、バタン、とすごい音を立てて、ドアが閉められた。

部屋の中に、数秒の静寂が訪れる。クリスヴィンは顔を引きつらせながら、隣に立っているデイスを見た。もしかすると彼も、優しかった姉の変貌に困惑しているのではないか。

視線をやると、デイスは閉じられた扉をじっと見てから、

「——さすが姉ちゃん、やるな」

そんな素っ頓狂なことを呟いて、にやりと笑った。

クリスヴィンは信じられないというように目を見開いてから、深い溜息を吐き、椅子に沈んだ。

頭の中で、彼女の言葉と、あの鋭すぎる視線がぐるぐる回る。たしか先読みの魔女は別名『慈愛の魔女』と呼ばれていたような気がするのだが。——一体何の間違いだ？

予想外すぎる展開に、クリスヴィンは額を掌で覆う。

今日掛けられた、と言うよりむしろぶちまけられた言葉の全ては彼の言葉を抉った。しかし、1つだけ彼には納得できないことがある。

クリスヴィンは薄眼で天井を見、もう1つ溜息とともに、口を開いた。

「もやし……だと……」

その日の夜、鏡の前で小1時間ぶつぶつ呟く半裸のクリスヴィンの姿を見ると、メイドの間で専らの噂になってしまうことを、まだ彼は知らない。

1・3 姉上様はかく語る（後書き）

これにて1話はおしまいになります。

サブタイトルは姉の暴走です 笑

もしかするとかなり停滞したりもするかもしれませんが、まだまだ続く予定です。

コメントなどいただけると七崎がにやにやします。
読んでくださってありがとうございます！

2・1 王子殿下はかく語る

「一体、なんだあいつは……」

クリスヴィン・アレリックは、執務室で頭を抱えていた。最近の悩みの種はもっぱら、魔術師であり、王子付き護衛騎士デイスの姉でもある、シアン・ミストラル嬢のことだった。

数日前にこの城に招かれた彼女は、まだ18というのに国中に名を馳せるほどの大魔術師であった。下々の噂によれば、災害によって傷ついた人々のことを助け、先読みによって幾度も人々を導いた、聖女のごとき慈愛に満ちた人物であるという。その容姿はめったに見ることが叶わないが、目にしたもの皆がまるで女神か天使のようであったと褒め称えるのだそうだ。

国民は皆、心優しい『先読みの魔女』に焦がれ、彼女をモデルにした本や寸劇なども存在するほどであった。クリスヴィンも、口にしたことこそなかったが、彼女の噂を聞いてからは一目見てみたいと思っていたのだった。

——それがまさか、あんな女とは。

「クリス、見ろよコレー、姉ちゃんが焼いてくれたクッキー！ 欲しいだろー？」

「いらん！ そんな恐ろしいもの食えるか！」

クリスヴィンが怒鳴るが、デイスは『そう？ うまいのになー』とメイドの淹れたお茶を片手に、嬉しそうにクッキーを頬張った。クリスヴィンとしてはそのような何を入れたかわからないものを口にするなんて信じられないが、彼女は弟に対しては、というより自分以外に対しては良い人なのであろう。——腹の立つことに。

「姉ちゃんの作る料理は世界一うまいぜ？ なんてったって俺の姉ちゃんだからな！」

「意味がわからん！——なんなんだあの女は！ 大体お前の話と全然違うだろうが！ どこが優しくて素敵な人なんだ！」

昔からデイスの話の半分以上は、故郷に残してきたという姉のことだった。強く優しく美しい姉がどれほど素晴らしい人かということとを、耳が痛くなるほど何度も何度も聞かされたものだ。

「優しいぜ？ それに美人だったろ？」

デイスがにかつと笑うと、クリスヴィンは書類を捲る手を止め、渋い表情を作った。

「それはまあ、不細工とは言わんが……」

確かにシアン・ミストラルは美人だった。白金の髪は淡く煌めき、大きな緑の瞳はガラス球のように澄み切っている。その肌は白く、薄く光を纏っているのではと錯覚させるほど輝いて見えた。

クリスヴィンはこれまで美しい令嬢を腐るほど見てきたが、彼女ほど凛として、清らかな印象を与える者はなかなかいないだろう。かく言う自分も、はじめて彼女を目にした時は、思わず見入ってしまったものである。——まあすぐに、そのことを海よりも深く後悔する羽目になったのだが。

とはいっても、クリスヴィンは自分の非を認めていた。

影武者として城に迎えてからというものの、デイスのことは大変丁寧に扱わせ、かつてでは考えられなかったほどの自由を許すように言いつけた。自分もデイスと同じだけ剣の練習に励み、毒の耐性を付け、周りが止めるのも気にせず友人のように振る舞った。夜にはこっそりと部屋を抜け出したデイスと、朝まで語らったりしたものだ。生まれた時から『王子』であったクリスヴィンにとって、それは新鮮で、孤独を埋めてくれるものだった。デイスが御前試合に出たいと言った時にも、反対派をねじ伏せてデイスのしたいようにさせてやった。

しかし、彼女の言っているのはそんなことではないのだ。生まれながら『王子』として生きてきた自分は、他人に『与える』という

ことに慣れ過ぎてしまっていた。彼女に怒鳴られたあの日、友人だと言いながら無意識のうちに自由を『与えた』つもりになっていた自分が恥ずかしくて堪らなかった。そしてそのことをもし知っても、何の咎めもなく許してしまいそうなのこの友人のことを思うと、吐き気がするほど自分が最低な人間に思えて仕方がなかった。

クリスヴィンとて謝ろうと、思ってはいたのだ。

——なのに彼女ときたら、彼の使うフォークを机に張り付けたり、靴の中に砂を入れたり、何故か自分のお茶にだけ塩が大量に入っていたり……。

「子供の悪戯か！ 年頃の女のすることとは思えんぞ！」

実に幼稚でくだらない、しかし厄介な悪戯を毎日毎日ねちねちと、それも絶対に犯人が彼女だとばれない様に仕掛けてくるのだ。

「はは、俺たち孤児院育ちだからさー。そういうの得意なんだよ」

そう言えばデイスも、いつもやけに要領よく部屋を抜け出して来ていた。孤児院を出た者は、皆あのようになってしまうのだろうか。——恐ろしい。王室育ちの自分には、到底わからない世界だ。

「もう嫌だ……なんとかしてくれ」

クリスヴィンは視界を覆うと、情けない声を出し椅子に沈む。

あんなに嫌味な性格のくせに、彼女は何故かメイドや騎士たちからの評判がすこぶる良く、『本当にシアン様は素敵な方よね！』『女神のようなお方だわ』などと言われている。猫かぶりの上手い女である。腹立だしいことこの上ない。

「ちゃんと素直に謝った方がいいよ。姉ちゃん1回怒ると、めっちゃくちやこえーから」

「それは、よくわかった……」

もううんざりだというように呟いたクリスヴィンの顔には、疲労の影が浮かんでいる。

デイスが、ま、がんばれよ、と笑って、最後の1かけを口に放り込んだ。

2・1 王子殿下はかく語る（後書き）

そういえば前回ナチュラルにもやしとかできてきましたが、はたしてこの世界にもやしは存在するのか……？

2・2 王子殿下はかく語る

あの女の態度は許し難い。幼稚で陰険で忌々しいことこの上ない態度だ。――しかし、彼女の言い分はある1点を抜かせば最もだった。――自分は断じてもやしではない。

クリスヴィンは天井を見上げて、はあ、と溜息を吐いた。

「謝るべき、なのだろうな」

誰にでもなくそう呟くと、彼はもう1つ息を吐いたのだった。

クリスヴィンはその日の夕、シアンの部屋の前に佇んでいた。

王子として生まれてきてからというもの、命令することには慣れていたが個人的に人に謝ることなどほとんどなかった。逆に、王子である以上必要以上に弱みを見せるな、常に堂々としていろという教育を受けてきたのである。

王子殿下は今まで味わったことのない種類の緊張を抱えて、迷いながらもドアをノックした。

「どうぞ」

誰かと問うこともなく、中からそう返ってくる。自分が今日訪れることをもしかしたら知っていたのだろうか。――『先読みの魔女』ならば、それも可能だろう。

「失礼する」

クリスヴィンがドアノブを捻り、中へ一歩足を踏み入れた途端、
「――っ！」

靴底がおもしろいほどすべり、足が宙に浮いた。

特殊な加工でも施したかのように異常につるつるに磨き上げられた床は、摩擦抵抗をもつともせず革靴を華麗に受け流す。咄嗟にドアノブに手を伸ばすが時既に遅し。クリスヴィンは素っ頓狂な声を上げ、冷たい床にしたたかに尻を打ち付けた。ぐえ、と蛙が潰れる

ような声が彼の口から漏れる。

「——う、お、お前……！」

クリスヴィンが困惑しながらもシアンを睨んだ。——床が自然にこれほどの光沢を放つはずもない。何のつもりだ、と怒鳴ろうとしたその時、王子にとっては残念なことに、廊下から戸惑った声が聞こえた。

「——お、王子……？」

クリスヴィンが顔を引きつらせたまま視線を上げると、ちょうど廊下を通りかかっていたメイドが困惑した表情を浮かべてこちらを見下ろしていた。

「……………」

「……………」

互いに見合いながら、硬直する。いつもなら『王子と目が合っちゃった！』なんてはしゃぐところだが、今の彼女にそんな頭はない。「ま……まさか転ばれて……だ、大丈夫ですか？ あ、私、医者……」

わたわたと慌てるメイドから顔を逸らし、クリスヴィンは

「——いい、かまわん。下がれ」

とそっけなく言った。眉間にいくら深いしわを刻みつけたところで、その頬は今羞恥でうっすら染まっている。

いきなり何もない（はず）のところで転んだのだ。しかもあのガラス細工のようだとか、人形のようにだと言われている王子が。メイドははじめのうちこそ本気で慌てていたが、だんだん事態を理解してきたのか、次第にその口端にこらえきれない笑いを燦らせる。

「は、はい。……失礼いたします」

肩を震わせながら去っていくメイドを見て、クリスヴィンは頭を抱えた。——きっと明日には、メイドたちの間に広まっているのだろう。『え？ 王子が？』『そうよー！ 盛大に尻もちについて、うろたえてらっしゃったそうよ』なんて会話をクリスヴィンが思い描いたかどうかは定かでないが、その顔は絶望に打ちひしがれて

いた。

「ぷ、あはははははは！」

諸悪の根源が悪魔の如き笑い声を上げるのが聞こえる。クリスヴィンは即座に立ち上がると扉を閉め、シアンの座る椅子につかつかと近寄った。

「お前、一体何のつもりだ！　これで明日から俺はメイドの笑い物だぞ！」

シアンは読んでいたらしい本を閉じると、ちっとも反省のうかがえない顔でクリスヴィンを見上げた。

「いいじゃない、メイドさんにだって笑う権利くらいあるわ」

「誰がそんな話をしているか！　俺は仮にも王子だぞ！？　威厳とか、いろいろあるだろうが！」

「このくらいでなくなる威厳なら、最初から堀にでもポイしちゃいなさい」

澄ました表情で、おどけたように彼女は言う。

——な、なんて可愛くない女なのだろうか！

クリスヴィンは白い頬を更に赤く染め憤慨した。怒れば怒るほどシアンが面白がるということに、未だ気づいていないようだ。

「それで？　何か用かしら？」

シアンがこの前の自分と同じように、頬杖をついて言う。いや、俺はあんなにふんぞり返りも、偉そうな態度も取らなかったぞと苛立ったが、自分が何をしにここに来たかを思い出し、クリスヴィンはなんとか怒りを鎮めた。

「く、その……」

クリスヴィンは言いにくそうに眉を寄せたが、拳を握ると、がばつと床と水平になるほど頭を下げた。

「すまなかった。先日のお叱り、御尤もであった。——王子としてではなく、クリスヴィン・アレリックとして……貴女に礼が言いたい」

シアンは突然のことに驚いたように目を見開いて、頬杖を止めた。

つむじが見えるほど腰を折るクリスヴィンを見遣って、瞳を細める。
「お礼？」

謝罪ではなく？とシアンは訝しげな表情を作る。

クリスヴィンは頭を下げたまま、しばらく黙っていたが、やがて、
ああ、と押し殺したような声で答えた。

「――貴方の弟君……デイス・ミストラルには、何度も救われた。
もちろん命もだが……デイスは、私の唯一心を許せる……友人、だ」
クリスヴィンが言って、また少しの沈黙が訪れる。

「――顔を上げて」

シアンの静かな声に、ゆっくりと王子が面を上げる。射抜くような視線を投げってくる彼女を同じく見返すと、クリスヴィンは続けた。

2・3 王子殿下はかく語る

「私は生まれながらにして王子だった。王子というのは、人の上に立つものだ。決して弱音を吐いてはいけないし、特定のものと親しくすることも許されない。私の身分をうらやむものも多いし、実際恵まれているのだろうと思うが……それでも、私は孤独だった」

母は自分を生んですぐに死んだ。父は立派な王だったが顔を合わせることも少なく、どうしても自分の父という風には見られなかった。厳格で正しい王。それがクリスヴィンの、父への印象だった。

自分を取り巻くのは仕事として世話を焼くメイドと、国と王子を守るために存在する騎士。たまに顔を合わせる貴族たちも、領地拡大、婚約、ご機嫌取りと腹の中で渦巻いているのだろうと思うと吐き気がした。それは、まだ幼かった自分には、少し重すぎる枷だった。

「デイスが城に來た日のことは、今でもよく覚えている。澁刺とした元気な少年で、私とは全く対極にある者のように見えた」

これが自分の影武者だなんて、信じられなかった。彼は、いつでも楽しそうに笑う、太陽のようだったから。

「デイスが私と食い違ふところの無いようにと、勉強も食事も、ほぼ1日中を共に過ごした。あいつは影武者としてももちろん立派にやってくれたが……それ以上に私に友人として振る舞ってくれた。外を見たことのない私に、たくさんのことを教えてくれた。孤児院でのくだらない悪戯の話や草花の見分け方、それに――大半は、姉上殿、あなたの話だった」

シアンは未だ微動だにせず、クリスヴィンの顔を見ている。彼は一度深く呼吸をし、そしてまた続けた。

「私は初めて聞く外の様子に心を躍らせ、家族というものに焦がれた。デイスの話はすべてが新鮮で、輝いて思えた。――私は、デイスのことを……羨ましいとまで思っていたんだ」

姉を語るデイスの顔は輝いて嬉しそうで、自分もその話に心を踊らせた。しかしそれと共に、僅かな、胸につかえるものも同時に感じた。

今ならわかる。あれはきつと、寂しさなのだろう。自分にとってただ1人の親友にとっては、自分が1番でないことへの寂しさか、自分にはそのように語れる話が無いことへの寂しさか。もしかすると、その両方だったのかもしれない。

けれど、デイスはいつも明るく、共にいると自分まで明るくなれそうな気がした。一緒に背負ってくれる人がいるということが、これほど心を軽くするとは思わなかった。彼の自由を奪って、本来なら抱えなくても良かったものを分かち合って、それでもデイスは、友人なら当たり前だと笑って言ってくれた。たった1人の家族に、会いたくないはずがなかったのに。

「――デイスには、本当に救われた。かけがえのない友人と思っている。デイスの自由を奪ったことも、貴女の孤独を顧みずにいたことも、本当に……申し訳なかった。――けれど……酷い話だが、私は彼に会えたことを本当に、嬉しく思っているんだ。……あの頃も今も、デイスがデイスであるのは、貴女のおかげなのだろうな。勝手な話だが……貴女に礼が言いたい。デイスに会わせてくれて、ありがとう」

そう言ってクリスヴィンは一瞬目元を和らげると、嬉しさと悲しさが混じって出来そこなった笑顔のようなものを浮かべる。

シアンはそんな彼を見てぴくりと眉を動かし、それからゆっくりと唇を開くと、ぽつりと落とすように言った。

「あなたにお礼を言われる筋合いはないわ」

「――ああ、そうだろうな」

彼女の硬い声に、クリスヴィンは自嘲めいた表情で、僅かに唇の端を上げる。

当然の報いだろう。これくらい言われないと、いけないのだ。影武者の存在を知っているものは皆、それは王子である自分のた

めには必要な犠牲で、王子とそのほかの人間では命の重さが違うのだ、と言った。殿下は自分の身を自分で守れる自信がありますか、貴方の身体は、貴方だけの物ではないのですよ、と。

そして張本人であるデイスは、決して自分のことを責めなかった。いつだって彼は笑うのだ。友達だったら当たり前だろ、と言って。

——自分に、彼と友人である資格などあるのだろうか。

「デイスが」

突然落とされたシアンの声に、クリスヴィンは顔を上げる。目が合うと彼女はなにか神妙な面持ちでじっとこちらを見てから、唇を開いた。

「デイスがあなたのこと……褒めてたわ。ちょっとお堅いけど、いい奴だって。いろいろあったけど、あなたと会えてよかったって」

「——デイス……」

クリスヴィンは拳を握りしめた。——彼はなんて優しいのだろうか。こんな自分にも、そんな言葉を掛けてくれるなんて。

クリスヴィンがそんなことを考えていると、シアンが眉を寄せた。「ちょっと、あんたバカじゃないの？ デイスが同情とか、そんな気持ちでこんなこと言うと思ってる？」

クリスヴィンが固まっていると、シアンは更にむっとして腕を組む。

「デイスは人を心配させないためにオブラートに包むくらいはするけど、嘘は付かない子よ。あなただってわかるでしょ？」

強い翠に見つめられ、クリスヴィンは目を見開く。

——初めて、嬉しさと情けなさで泣きたくなった。彼は自分の威厳に掛けて決してそのような真似はしなかったが、なんとか、ああ、とだけ答えて俯いた。

「そうだな……私は自分だけでなく、デイスのことまで侮っていたようだ。彼は、俺の……大切な友人だ」

再び顔を上げたクリスヴィンは、ぎこちなく、しかしどこか晴れやかな笑みを浮かべていた。

その顔を見て、シアンは眉を僅かに動かす。

——この男が、型どおりの王子殿下などだったら怒鳴り散らして引きずり下ろして、死ぬより痛い目見せてやろうと思っていたのだけれど。

彼女は少し考えてから、諦めたように1つ息を吐いた。

「まあ……あんたも反省してるみたいだし、もういいわ。私もちょっと言い過ぎた感あるし……悪かったわね」

シアンはそう言って、ふっと視線を逸らした。

「——は……？」

——もしかして今、謝ったのか……？ クリスヴィンが目を見開いたまま硬直していると、シアンはむっと口を曲げる。

「なによ、私だって謝ることくらいあるわよ。あの時は長年の苛立ちをぶちまけたかっただけ。ま、反省したんならいいわ。お互い水に流しましょ？」

いつまでもふんぞり返ってるような奴なら容赦はしなかったけどね、と付け加えて、彼女は意外なほどあっさり表情を緩めた。

クリスヴィンとしては、『今すぐ土下座して靴を舐めなさい頭踏ませなさいひれ伏しなさい』くらい言われるのではと気負って来たので、なんだか拍子抜けしてしまう。

そんなことを考えていると、

「——別に、許してほしくないんならそれでもいいのよ？」

顔に出ていたのだろうか、彼女がにやりと笑ったので慌てて手を振った。

「いや、そんなことはない。……ありがとう」

クリスヴィンが言うのと、シアンはふふ、と笑いを漏らして立ち上がった。

「美味しいお茶があるの。クッキーも焼いたし、よかったら一緒にどう？」

既に用意をしながら言う彼女の中にはクリスヴィンが断るという

選択肢はないようだ。強引な女である。

しかしその顔は——ディスプレイに聞かされていたように、優しく美しい笑みをたたえていた。

「ああ……ありがとう」

昼下がりのあたたかい陽気が惜しみなく注がれる中、クリスヴィンは少しだけ微笑んだ。

こんな、清々しい気分はいつ以来だろうか。

クリスヴィンはゆるく笑みを浮かべて、彼女が勧めてくれたクッキーを一口かじり、そして……

「か、からああああああっ！」

激辛だった。大急ぎでお茶を口に入れると、今度は——激苦だった。

「う、うええ……」

「あはははははははは！」

思わず口に含んだお茶を、カップの中に吐きだしてしまう。汚いとか思わないでほしい、床にぶちまけなかっただけ上出来だ。

「な、な、おま、なんのつもりら！」

回らない舌に半泣きという情けない様子でクリスヴィンが睨みつけると、彼女は心の底から楽しそうに笑った。

「だって、あなたからかうのおもしろいんだもん！」

天使のような笑顔で、悪魔のようなことをのたまった。

「——ふ、ふざけるな！」

信じた自分が馬鹿だったのか？　これが素晴らしい姉で、世紀の大魔術師だと！？

もう嫌だ……と頭を抱えた彼に、シアンは憎たらしいほど美しい笑みで言った。

「これからもよろしくね、クリスヴィン」

——王子の受難は、まだまだ続きそうである。

2・3 王子殿下はかく語る（後書き）

これにて2話はおしまいです。ここで終わるはずだったんですが、まだ姉様が王子で遊び足りないって言うので続きます。毎日更新とはいかないかもしれないですが、がんばって書いていくのでよろしくお願いします！

姉様と王子に拍手してくださった方、ありがとうございます！王子はこれからも不憫な目に合うので、よかったら応援してやってください^^笑

ありがとうございました！

3・1 王子殿下のお仕事

「デイス、まだ玉ねぎ嫌いなのか？　ちょっとは食べないとだめよ。ほら」

「うえー、姉ちゃんにあげる」

「こら、人の皿に寄越さないの！　はい、口あけて」

「うー、へーい……」

「……………」

「姉ちゃん姉ちゃん、これ町で見つけたんだけど、姉ちゃんに似合うと思って！」

「え、くれるのか？　ありがとうデイス、お礼にケーキでも焼くわ」

「やったー、俺チョコのがいい！」

「チョコね、わかった。あとで届けましょうか？」

「ううん、俺もついてく！」

「そう？　ふふ、じゃあ一緒に作りましょ」

「うん！」

「……………」

「あ、デイスお帰りー」

「姉ちゃん、また俺の部屋勝手に入って……この辺男ばかりなんだから、あんまり夜遅くに來たらダメって言ったじゃん」

「私を誰だと思ってるのか？　大丈夫よ」

「俺が心配なの！　これからは俺が迎えに行くまでちゃんと待ってて」

「えー、でもデイスに早く会いたいんだもん」

「む……」

「いいでしょ？ デイス」

「——わかったよ。……でも、頼むから気をつけて来てね」

「まかせなさい」

「……………おい」

沼の底から聞こえてくるような押しつぶされた声に、シアンとデイスが、なに？ と顔を上げる。その視線の先には、整った顔を恐ろしく歪めて、大変怒っておられるクリスヴィン。

「——お前ら……いつもいつも人の目の前でベタベタベタと、一体何なのだ！ おかしな噂を立てられなくなければ、もう少し姉^{うだい}らしい振る舞いをしろ！」

額にぴきつと青筋を浮かべて、眉を吊り上げたクリスヴィンが憤慨する。

重要人物であるシアンと、自分の警護をしているデイス、3人である時間が必然的に長くなってしまふのは、仕方ないことだと理解している。

しかしこうも毎日人の目の前でベタベタベタされては、さすがにクリスヴィンとて居辛いことこの上ないというものだ。何故自分の執務室で、自分がこんなにも疎外感を味わわなくてはならないのか。

クリスヴィンの言葉に、シアンは美しい眉をほんの少し寄せた。

「——はあ、嫌だわ。私たちの姉弟愛を、そんな汚らわしい目で見ないでくれるかしら？」

彼女は軽蔑するようなまなざしをクリスヴィンに向けると、『デイスはあんな穢れた人間になってはダメよ？』などと弟に言い聞かせている。しかもデイスも『うん、わかったよねーちゃん』などにこにこ笑っているではないか。

「デイス、お前一体どちらの味方なんだ！」

クリスヴィンが拳を震わせてそう問うと、彼の唯一無二の親友、デイスはきょとんとクリスヴィンを見て、

「姉ちゃん！」

満面の笑みで答えた。

「……………」

そんな質問するなんてみみっちい男ね、と言うシアンの声もおぼろげに、クリスヴィンは絶望に打ちひしがれた。

今やこの城に自分の味方など、1人もいないのではないか？

クリスヴィンは一人執務をこなしながら、うおおと頭をかきむしった。

城中のメイドに憧れのまなざしを注がれ、城中の騎士にちやほやされて。あの女はいつの間にか、城中を掌握しているようにさえ見えてきた。

「……………はあ」

クリスヴィンはペンを置くと、椅子に深くもたれかかった。

——こんなことを考えていても仕方がない。さっさと仕事を終わてしまわねば。

クリスヴィンは重い身体を起こすと、いくら書いても減らない書類の山に再び手を付けた。

「クリス、最近ちゃんと寝てるか？」

デイスは食事にも来ず、執務室にこもりっぱなしのクリスヴィンの顔を見つめて心配そうに呟いた。

クリスヴィンの父は大変厳格で、それまでにあった貴族の横領や官吏たちの不正を、かなり厳しく取り締まった人であった。当然貴族たちからはやっかまれていたが、民衆からは大変支持されていた。クリスヴィンは彼の父ほど重圧を感じさせるようなオーラを纏ってはいなかったが、彼もまた不正を許せない性質である。そして自分にも厳しいので、いつも仕事が溜まると執務室から1歩も動かな

くなるのだ。

民衆の理想の王であった彼の父、その子供にのしかかる期待は、前代以上に重いものである。クリスヴィンはいつだかデイスに、『国民が期待してくれているなんて、王子として誇らしいことではないか。私はその期待を超えられるよう、努力するだけだ』と言ったことがある。しかしデイスは、幼い頃の彼が毎晩のようにうなされ、体調を崩していたこともまた知っているのだ。彼の肩にのしかかるものの重さは、いくら元影武者とはいえ、自分には一理解できないもののなのだろう。

「クリス、ちよつとは休まないとダメだぞ」

デイスがそう言うのと、クリスヴィンはうっすらとクマを作った顔を上げる。

「いや、まだ平気だ。今日中にこの書類を書き終えてしまいたいのでな」

クリスヴィンはゆるく微笑むと、再びペンを動かし始める。このようなやり取りは今まで何度も行ってきたが、クリスヴィンが大人しく休んでくれたことは1度もなかった。

「んー……じゃあ、なんかせめて食ってよ。甘いものでも持ってこようか？」

デイスは心配そうな顔でクリスを見る。クリスヴィンは、いや大丈夫だ、と断ろうとして、

「――ああ、頼む」

デイスと目が合うと少し考えてからそう言った。――倒れてしまつては元も子もないのだ。腹が空かずとも、多少のエネルギーは摂っておかねばなるまい。

「おっけー。ちよつと待ってろな！」

どこか意味深な笑みを残して部屋を後にしたデイスを見て、クリスヴィンはなんとなくいやな予感がした。

3・2 王子殿下のお仕事

「はろークリスマスヴィン」

そしてその予感は大的中した。戻ってきたデイスはティーポットと菓子だけでなく、何故か姉まで伴っていた。

「な……」

「あら、随分景気悪い顔してるわね。死人みたいよ」

そんな失礼なことを言うと、彼女はよいしょ、と我が物顔でソファに腰掛けた。ティーカップと焼きたてのシフォンケーキが、机の上に並べられる。

「さ、早くお茶にしましょ」

「わーい」

シアンの横にデイスも座ると、2人してクリスマスヴィンの方を見てくる。

「お前の作ったものなんて食えるか！ 何が入っているか考えただけでも恐ろしい」

クリスマスヴィンが忌々しげに言うと、シアンはふっと目を細めた。

「あら、そんなに期待されたら答えたくなっちゃうじゃない」

「期待などするか！」

思わず大声で叫んだせいで、頭がくらくらする。――やはり、寝不足なのだろうか。

そんなクリスマスヴィンを見て、デイスは、ははと笑った。

「クリスー、本当に睡眠薬とか入れられなくなかったら、早くこっち来た方がいいぜ」

「うふふ」

隣でシアンが完璧に美しい笑みを浮かべる。――やりかねない、この女ならやりかねない。

クリスマスヴィンは仕方なく重い腰を上げると、2人の向かい側にどかっと座った。

「ほら、これで満足か!？」

「はい、よくできました」

シアンが小さい子にするように、ぱちぱちと手を叩いてくる。クリスヴィンは、ふざけるな、と怒鳴ろうとしたが、これ以上余計な体力を使うのも面倒になって止めておいた。

「……………」

「……なんだ」

シアンはクリスヴィンを見て少し何か考えるような素振りを見せたが、

「——んー、別に」

そう言って、いただきまーす、とお茶を口にした。

デイスはお菓子をもごもごと頬張って、『やっぱねーちゃんの作ったのが1番だな!』『あらあらうふふ』なんて茶番を繰り広げている。

そんな2人を横目にクリスヴィンはうんざりしながらお茶を1口飲んで、

「……………」

不思議そうにカップの中を眺めた。

「もしかして初めて飲んだ? 私たちの故郷の特産品なんだけど、良い香りでしょ?」

こっちに来る時持ってきたの、とシアンが言うと、

「いや、これなら以前デイスに飲ませてもらったことがある」とクリスヴィンが首を振った。

「あら、そうなの?」

「うん、前姉ちゃんを送ってくれたのあげたんだ」

デイスの言葉に、シアンはなるほどね、と頷いた。文通しかできなかった10年ほどの間、2人は物を送り合ったりすることも多かったのだ。

クリスヴィンはもう1口お茶を含んで、それから疑わしげに眉を寄せた。

「お前、何か入れたのか？」

「……………あら」

クリスヴィンの言葉にシアンは少し驚いてみせて、それからふうん、と彼のことを見つめた。

「――あなた意外と鋭いのね」

感心感心、と頷くシアン。クリスヴィンは『お前一体なにを……！』と怒鳴ろうとしたが、彼女はそれを遮って言った。

「別に何も入ってないわ。ただちよっとカップにまじないがしてあるだけ」

「――まじない？」

「そ、ちよっとしたおまじないよ」

クリスヴィンとデイスが彼女の顔を見て、続いてカップに視線を落とす。特に変わったところはないように思えるが、と2人が首を傾げるのを見て、シアンは笑った。

「目に見えるものじゃないわ。ちなみにクリスのは緑、デイスのは赤、私のは黄色のまじないよ」

「え、俺のにも？ ぜんっぜんわかんねーや」

デイスが空になったカップを手の中にくるくる回してみるが、やはりただのカップだ。

「普通はわからないものよ。クリスはちよっと神経質なのね」

「あー、たしかにきっちりしてんの好きだよなー。蜜柑のすじとか、魚の小骨も全部きっちり取り除くタイプ？」

「やーね、男なら鶏だろうと魚だろうと頭から尻尾までバリバリ食べなさい」

「俺を殺す気か！？」

どう考えても喉に刺さる。そんな間抜けな死に方は絶対御免だ。王室と言うのは時折おかしな人が生まれるもので、痴情のもつれの後女に刺されて死んだり、ある日自分は本当は魚なんだと言い張って海に飛び込みおぼれ死んだ先祖もいる。そんな彼らと自分がひとまとめにされるなど、考えただけで恐ろしい。

「それで、黄色とか緑とか、一体何のことだ？」

だんだん面倒になってきたクリスヴィンがため息交じりに聞くと、シアンは少し考えてから、机の上に指でぐるりと円を描いた。その指先から白い光が漏れて、淡く光りだす。

驚いた顔をするクリスヴィンに『あら、魔術を見るのは初めて？』と笑って、シアンは円の中心を通るように線を引き、その両端に『白』『黒』と文字を描く。

「魔術の基本は白と黒。この2つは対極にあって、白は未来を、黒は過去を司っているの。私は『先読みの魔女』って呼ばれてるけど、それはただの通り名で、魔術師的に言うと『白の魔術師』ね」

続いてシアンは、円を6等分するように、更に2本線を引く。また白い光が溢れ、机の上に文字を残した。

「そして白と黒を基本に、魔術は6つの領分に別れるの。この白に近い方が緑と黄色。緑は森と安息を、黄色は大地と知識を司るわ。そして黒に近いのが繁栄と炎の赤と、水と変化を司る青。対極にある領分を操るのは難しいけど、隣り合うものくらいならちよつと上級の魔術師になると使えたりするものよ」

ということは、白の魔術師である彼女が赤のまじないをしたというのは、かなりすごいことなのではないだろうか。やはり先読みの魔女の名は伊達ではないということか。

シアンの話を黙って聞いていたデイスが、カップを片手に首を傾げた。

「えーっと、じゃあ俺はなんか繁栄するってこと？」

シアンは少し笑って、

「そんなにすごいものじゃないわ、ちよつとした景気づけみたいなものよ。デイスはいつもよりちよつと疲れにくかったり、クリスは身体が安まったり、私は少し頭がすっきりする、そんな程度のもの。あまり強すぎる魔術には、いろいろな制約がもたらされるものだから」

そう言って机の上の文字を掌でふき取るようにする。すると淡い

光はすうつと消え、元通りの美しい木目が現れた。

「う、うわー、すげー！ 魔法じゃん魔法！ 姉ちゃん本当に魔術師なんだなー！」

「あつたり前よ、私の努力と天賦の才を舐めないで頂戴？」

ちよつと悪戯っぽく笑って、でもこれくらいのことならまだ序の口よ？と彼女は言った。

3・3 王子殿下のお仕事

「なんだか本当に身体が軽くなった気がするな」

お茶を終えて、ソファの上でクリスヴィンが肩を押さえながら言った。バキバキに凝り固まっていた筋肉が、少しほぐれたような気がする。

「私にかかれればこれくらい朝飯前よ。あったかいもの飲むこと自体もいいんでしょうね」

シアンはティーポットを下げ、ソファの上でくつろぎながら言う。

「そうそう、クリスもこれからはちゃんと休息とんなきやダメだからな？ バシッと休んで、ビシッと仕事する、これが出来る王子様ってな」

にかつと笑ったデイスにクリスは『ああ』と返事をして、それから

「……………」

「クリス？」

かくん、と首を折った。

「え、クリスどうしたんだよ？」

慌ててデイスがクリスヴィンに近寄り、顔を覗き込むと――クリスヴィンはうっすらと息を立て、眠っていた。

「あれ？ クリス？」

不思議そうに目を見開くデイスの後ろで、シアンが椅子から立ち上がって、

「あら、もう寝ちゃったの？」

事もなさにそう言った。

「――姉ちゃん、なんか盛った？」

デイスがたおやかな笑みを浮かべる姉を見上げてそう聞くと、彼女はいいいやと首を振った。

「盛ってないわ。ちよつと……まじないを、ね？」

姉の言葉にデイスが首を傾げる。

「どゆこと？」

「緑の領分にもいろいろあるのよ。クリスのカップに掛けたのは、身体の疲れを取るまじない。でもクリスのフオークに掛かったのは、睡眠を促進するまじない」

姉の言葉にデイスは苦笑いする、かと思いきや、

「すげー、そんなこともできんの？ さすが姉ちゃんはずげーな！」
はしやぎながらそんなことを言った。クリスヴィンが起きていたとしたら、身体の不調も忘れて怒鳴り散らしているところである。

「まーね。彼、そろそろ限界だったし」

姉の言葉にデイスが再び首を傾げる。たしかにクリスヴィンは働き過ぎだとは思うが、普段からこんな調子だ。

シアンは僅かに目を細めて、弟に微笑んだ。

「黄色と緑の領分に精通していればわかるけど、精力の巡りが悪くなったのよ。このままじゃもうすぐぶっ倒れるところだったわ」

「――そっかー。ありがとな、ねーちゃん」

デイスはクリスヴィンを見て苦笑を漏らした。本当に、仕事に関してはかなり優秀なのに、困った王子様だ。

シアンはそんな弟の姿に小さな笑みを漏らすと、クリスヴィンの書き物机の上に乗っている、大量の書類に目をやった。

「ふむ……なるほど。これくらいなら私にも理解出来るわ」

ぱらぱらと捲って、シアンは頷く。

「あ、俺もやる！ 昔はクリスの振りしていろいろやってたし、結構計算とかも得意だよ」

「そうね、じゃあ一緒にやりましょ」

類稀なる才能の持ち主である姉と弟は簡単にそう言って、取りあえずクリスヴィンを寝室に運んでから仕事をすることにした。

デイスが易々とクリスヴィンを抱えて運び（ちなみにお姫様抱っこと呼ばれる類のものだったので、後にメイドたちの間で大変噂になってしまう）、彼をベッドの上へと下ろした。

普段眠りの浅い彼がここまで深く眠っているのを見るのは久しぶりのことだった。

白い肌に、痩せて少しばかりやつれ、しかしそれすら儚げに見せる、繊細そうな面持ち。

シアンはそつとクリスの顔を覗き込んだ。『高貴な王子様』もこうして目を閉じていると、彼もまた自分と歳の変わらない、ほんの子供であるということがよくわかる。

デイスも姉の横からクリスヴィンを覗き込み、安らかな彼の寝顔を眺めた。

「よく寝てるな」

「よく寝てるわね」

2人は顔を見合わせると、どちらからともなく子供のような、まだ2人が孤児院にいたころとまったく同じ、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おいお前らああ！ これは一体どういうことだ！？ 消せ！ 今すぐ消せ！」

「ぶあっはっはっはっはっは！」

「あはははははははは！」

数時間後、目が4つになったりひげが生えたり額に謎のマークが描かれたりしたクリスヴィンが部屋に駆け込んだのだが、その道中で彼が誰かに目撃されなかったかというところ……それはまた、別話である。

3・3 王子殿下のお仕事（後書き）

これにて3話は終了です。

あくまで自分比ですが、たくさんの方に読んでいただけて本当にうれしいです！ありがとうございます！

読者さまは一体誰を気に入ってくださっているのか、とか、今のところ王子に見せ場はない気がするけどそれってどうなの？とか思うところはありますが……彼らの魅力を引き出していけるように頑張りたいと思います。

よろしければこれからもお付き合いください！

閑話1 人の思いとは時に美しく、そして時に残酷なものである。

はじめまして、みなさん、クオード・ラストです。……ええ、お前誰だよ、って思ってますよね、わかってます。

俺は城に務める騎士で、諜報を主にしていて、一児の父で……えっと、俺のことは取りあえず騎士ってことだけ覚えといてもらえれば結構ですんで。ええ、多分そんなに重要なキャラじゃないって作者が言ってますしね。あれ、なんか前が見えねーな……。

俺は今稽古を終えたばかりで、部屋に戻ろうとしていました。そこに誰かさんの声がして、いつもの癖で思わず隠れてしまったんですよ。——いつもの癖って諜報のことですよ、変なこと想像しないでくださいね。

「あ、あの、デイス様のお姉さんがあの魔術師様って、本当ですか？」

まだ若いメイドのお嬢ちゃんがそう言って、なんか見てるこっちが恥ずかしくなるほど一生懸命にデイス隊長に話しかけてます。そういうや、あの嬢ちゃん前もデイス隊長のこと目で追ってたよなー。若いっていいねー。

「ああ、そーなんだよ。俺も知らなかったからびっくりしちゃってさー」

はは、とデイス隊長が爽やかに笑うと、嬢ちゃんはそばかすのある頬をぽつと赤らめて目を逸らした。はー、青春だね。

しかし噂の『先読みの魔女』が、隊長の姉さんだなんて、俺も初めて聞いた時はびっくりしてきました。言われてみれば、たしかに目鼻立ちがそっくりだよな。

とはいえ隊長にはあのシアンさんみたいな、金箔振りまいたようなオーラはあんまりない。——別に隊長を貶してるわけじゃないですよ、俺は正直ああいうキラキラした人は、若干苦手なんです。え

え、俺が平凡野郎だからですよこんちくしょー。

よく見ると隊長もかなり整った顔をしてらっしゃるんですが、ちよっと平凡そうな、人当たりの良さそうな雰囲気がかっちの緊張感まで解いてくれるような、そんな感じのする人です。――まあほんとは非凡もいいところですけどね、隊長も。

隊長はお堅い貴族騎士連中と違って身分の低いメイドさんにも気兼ねなく話しかけるので、一部のメイドさん方からは密かに慕われていたりする。特に、大人しい、自分から男に話しかけるのが苦手な女の子たちは、隊長の気さくな態度にコロッといっちまってるみたいです。

もっとも隊長自身はそのことに気付いているのかいないのか、もしくは心に決めた人でもいるのか、まったく浮いた噂はないのだけれど。

「あんなにお綺麗なお姉さまがいらっしゃったなんて、全然知りませんでした……。素敵なお方ですね」

憧れの男に話しかける口実ができたことは嬉しくとも、あんなキラキラ姉さんの存在は、彼女たちには少々酷だろう。あの姉さんは城のメイドさん方にも慕われているみたいだけど、元来引っ込み思案な彼女たちは、あれほど綺麗な人が姉ならば、自分のような女なんて……と気後れしてしまいそうなもんだ。女心つても難しいですよねえ。

ちよっと悲しそうに笑う嬢ちゃんに、デイス隊長は優しげな笑みを浮かべた。その笑顔に嬢ちゃんが、またかあっと頬を染める。

――今更だけど、俺、どっか行くべきかな……。

そんなことを考えていると。隊長はいつも通りの人のいい、にかっとした笑顔で口を開いて、そして……

「だっろー！ もう姉ちゃんは美人だし優しいし料理も上手いし、本当に最高の姉ちゃんなんだ！ まさか魔術まで使えるようになったとはさすがに思わなかったけどなー。いやー、でも俺、本当に姉ちゃんの弟でよかったー！」

.....。

あんた、いったいなんてことを……。

嬢ちゃん可哀そうに、固まっちゃってるじゃないっすか。しかし隊長はノンストップ、滝のように、その口からは姉を称賛する言葉が流れ落ちてくる。

——もしかして、薄々気づいてはいたけど、隊長ってシスコ……っていうか、俺助けに入るべきかな……？

俺は困り果てて、けどどこまでも純粹過ぎる瞳で嬉しそうに語る隊長を止めることも出来ず、仕方なく一緒に話を最後まで聞くことで嬢ちゃんに詫びようと思いました。

——ごめん、嬢ちゃん。この隊長、ある意味剣持ってる時より怖いっす……。

閑話1 人の思いとは時に美しく、そして時に残酷なものである。（後書き）

クオード…アラサー、諜報、なんか不憫その2

今後も登場しますが、別に覚えなくても支障はないかも……という
キャラ位置でお送りします。笑

閑話2 楽しいことは、よきことである。

「クリス、最近なんか姉ちゃんと仲いいな」

剣の稽古の相間にそう言った俺を、クリスは半漁人（伝説の生き物、見たら死ぬらしい）でも見たような顔で凝視した。

「デイス、お前は一体何を見ているんだ……？」

クリスはくわっと目を見開いて……おー、この顔初めて見るかも。はは、クリスって結構おもしろい奴だよなあ。

クリスはみんなに人形とか言われてるけど、俺が見る限りではすっげー人間らしい奴だと思う。根が真面目だから、仕事とか、臣下と接するときはついついお堅くなっちゃうんだよなあ。こんなに面白い顔もすんのにみんな知らないのも……勿体ないよなあ。

「何故、俺があんな女と親しくせねばならんのだ……？ 不可解にも程がある」

俺の言葉がお気に召さなかったようで、複雑そうな表情のまま、クリスは剣の素振りを始めた。

近頃クリスが剣の稽古に熱心だというのは、城のちょっとした話題になっていた。クリスは、俺が影武者だった時とかはずっと一緒に剣の稽古してたけれど、最近では執務に追われて、ペンを持つ方が圧倒的に多かった。だからかな、もしかして『強いお方が好きですの』なんて言うどっかのご令嬢に惚れ込んでるんじゃないか、いやでもあの王子だぞ、と城のあっちこっちから声が漏れてくる。クリスは気付いてないみたいだけど、結構今ホットな話題だぞ。

俺はその理由について知っている数少ないうちの1人なので、『まあ気にしないで大丈夫だって』とみんなに言いながら、なんとなく微笑ましい気持ちでクリスを眺めていた。どーせ、姉ちゃんに、も……軟弱、みたいなこと言われたのがまだ気に障ってるんだろう。

「よし、始めるか」

「ああ、頼む」

俺とクリスは互いに向かい合って、剣を構える。練習だからもちろん刃は潰してあるけど、やっぱり当たったら痛いから当たりたくはない。

実を言うと、俺が剣を覚えた最初の理由はそれだ。……だって痛いのがだったんだもん、しょうがないじゃん。

国のみんなを守りたいとか、そんな大それたことは考えられなかったし、正直今でもなんで剣を振るうのかって聞かれたら困る。

でも俺はクリスが好きだし、騎士団のみんなが好きだ。それで、目の前で困ってる人がいたらやっぱり助けたくなるし、そのために他の人を傷付けてもいいのかって聞かれるとこれまた困るんだけど、でもやっぱり自分の好きな人の命は、自分勝手かもしれないけど、他の何にも変えられないと思ってる。

だから、もしかしたら俺は騎士としては出来そこないなのかもしれない。でも、クリスや騎士団のみんなや、もちろん姉ちゃんが危険に晒されていたら、俺は迷わず剣を振るうし、ためらわないだろう。

騎士になるのなんて別にそんな理由でもいいかなって、最近ではそう思うようになった。

「うりゃあ!」

俺は下から上に薙ぐように剣を振る。クリスは身軽さを生かし、それを軽くステップして避ける。そして、その反動で一気に間合いを詰めてきた。

「くっ!」

空気を切り裂く様にして、細い剣が突き出される。

フルーレ（練習用の細身の剣、レイピアみたいなもの）とはいえ、やっぱり当たりたくはないに決まってる。俺はクリスの背の方へと

回り込むようにしてその剣を避け……するとクリスは懷から短刀を取り出し、俺の腹目掛けてそれを振った。

「——うおっと！」

シュ、と空気が切れる音が鳴り、けれど間一髪、俺たちはまた間合いを空けて互いに見合う。

「……やはり、これくらいでは騙されんか」

手先を見るな、目を見る、肩の、腰の動きを見る。

俺の剣の師——つまり現騎士団長の教えだ。クリスの動きは、全力で突き刺しにきたにしては小さすぎた。そのことを理解するかしないかのうちに、咄嗟に身体が地面を蹴っていた。

「……はは、まあちょっとビビったけどな」

俺は少し笑い返して、再び剣を構えなおす。

もちろん使うものの刃は潰しているけど、基本的に俺とクリスの稽古ではなんでもありだ。

クリスはこんなに生真面目な王子様してるけど、剣に関しては結構変則的な動きをする。あまり体格の良くないクリスが、『死んでも生き残れ』という団長の教えの下しごかれた結果だ。

俺は乾いた唇を舐めると、強く地面を蹴った。

開いた間合いを詰める時には、ためらってはいけない。俺は一気に踏み込んで、自分の間合いまで詰めると、今度は真正面から剣を振った。

クリスが受け流す。力では俺の方が上、賢明な判断だ。だが……

「てやっ！」

剣だけが、技ではない。

俺は体当たりの要領でクリスに半身をぶつけ、そして、ふらついた体制を立て直そうとした、クリスの軸足を払った。

「なっ！」

さすがに想定外だったのか、クリスは重心を崩す。そして、そのまま地面に尻もちをついた。

「——く……」

「さ、まだやる？」

にやりと笑ってクリスの喉元に剣を突き付けて言うと、

「――まさか、お前に敵うとは思っていないさ」

ふっと顔をゆるめたクリスが、剣を手放して両手を上げた。

引き際を心得ているのも、立派な剣士の条件だ。

俺は息を吐いて、剣を腰に納める。

「まー、護衛騎士隊長である俺が、クリスに負けるわけにはいかな
いしなー。でも楽しかったぜ、あんがとな」

「ああ、俺もだ」

手を差し出すと、クリスは微笑んで俺の手を取った。ぐっと引き
起こしてやる。――うーん、王子じゃなかったら騎士団に欲しいく
らいの人材なんだけどなー。クリスは真面目で筋もいいから、もっ
と毎日稽古したら絶対立派な騎士になると思う。

「お前、息も乱れんのか」

木陰で並んで一休みしていると、いつもより若干髪の乱れたクリ
スが聞いてきた。

「まーな、稽古してるし」

俺が言うとクリスはちよつと眉を寄せて……拗ねてんのかな？

俺は隣に座る、儂げな顔立ちの王子様を見た。

クリスは細身だし騎士としては不利かもしれないけど、でもその
辺の人に比べたら結構鍛えられた身体をしていると思う。……まあ
最近は職務に追われてやせ細ってる感じではあったけど。

姉ちゃんもきつと、一国の王子がただのもや……軟弱者だと思っ
てるわけじゃない。あの顔は、ただからかってるだけだ。

俺はそうクリスに伝えてやろうかと思ったけど、

「よし、もう1度手合わせを頼む。――次はお前に1度くらい剣を
当ててみせよう」

そう言って笑うクリスは前より血色も良く、最近では姉ちゃんの
言葉がそんなに屈辱だったのか、食事も睡眠もいつもの倍くらい取

つてくれるようになった。——といっても、それでやっと普通くらいなだけだな。

それに……

「——どうかしたか？」

俺が笑いを漏らすと、クリスが不思議そうに俺の顔を眺めた。

「——いや、なんも。うし、やるか！」

俺は立ち上がって、クリスヴィンと見合う。

——この生真面目な顔が姉ちゃんにからかわれてるとこ見るのは……結構おもしろかったりするんだよねー、これが。

俺はもう1つだけ笑いを噛み殺して、息を吐いて集中した。

まあ、クリスはきつと姉ちゃんみたいな人に、ちょっとくらいからかわれた方がいい。うん、これからの人生で、きつといつかためになる日が来るさ。

俺は繊細そうなクリスの顔を見ながら、おもしろ……クリスの将来に幸あれ、と願ったのでした。おしまい。

閑話2 楽しいことは、よきことである。(後書き)

クリスヴィンとデイスのお話でした。

剣の場面を、もっとスピード感だして書けるようになっていたいな……

いつのまにやらたくさんお気に入りやなんかをただけて、嬉しくてどうにかなりそうです……！拍手もいつもありがとうございます

(^○^)！

クリスはもう姉にヒーローの座を渡せばいいんじゃないかな、とか最近思ってきました。クリスがお姫様だったら、つんでれとか言うってごまかせそうだな、とか……だめですか？(聞くのか

読んでくださってありがとうございます！

次はたぶんお城を飛び出して活躍、できたらいいな、と思います…

…(へーへ)

4-1 姉上様とお手紙

よく晴れた日の下、金属同士のぶつかり合う高い音が響く。

「——っ！」

金色の髪をした青年は、振り下ろされる剣を一步引いてかわした。それを追うようにして、体格のいい男がまた剣を振り上げる。

「うりゃああ！」

男は体格がいいだけあり、剣にはよく力が乗っている。ぶわ、と空気を切る音がして、しかし青年を捉えることは敵わない。今度は相手の背の方へ回り込むようにして、青年は振り下ろされた剣を避けた。

途端、青年は剣を薙ぐ。

大技には確かに威力があるが、反面当たりにくいという欠点がある。更に、避けられた場合次の攻撃へ繋げづらく、隙が増えてしまうのだ。

「っ！」

大男が急いで振り向いたときには、既に青年の剣は男の背を捉えていた。

「——ぐあっ！」

ガン、と鎧を着けてなお、内臓を揺らすような衝撃が男を襲い、男の手から剣が離れる。

剣の転がる音を背に、青年は地に伏した男に剣を突き付け、鋭い眼光を向けた。

「止め！」

試合場に太い声が響き、ざわりと観衆が揺れた。

「勝者、デイス！」

その声にデイスは、構えていた剣を下ろすと汗を拭い、拳を軽く上げて笑った。騎士たちの歓声と拍手が訓練場に沸く。

「——隊長、ありがとうございます！隊長に手合わせしてもらえ

るなんて光栄っす！……いてて……」

男は苦笑しながら背を押さえ、しかしどこか満足そうに頭を下げる。デイスは『大丈夫か？』と笑って彼の肩を叩き、

「いや、お前も筋は悪くないぜ。真正面から向かってくのもいいけど、緩急を覚えれば今よりずっと強くなれる。がんばれよ」

そう言っただけで笑った。

「は、はい！　ありがとうございます！」

2人は握手を交わすと、試合場に一礼してから場外へ出た。

「隊長、すごかったっす！」

「マジで、オレ漏らすかと思いました！」

「はは、あんがとなー」

その腕前と人柄の良さから若くして騎士たちの信望も厚い護衛隊長、デイス・ミストラルは爽やかに汗を拭い、そして

「姉ちゃん！」

特等席のように設えられた敷物の上に座っている姉の元へと、子犬のように走り寄った。

「デイス、お疲れ様。さすが私の弟、すごかったわ」

パタパタ走ってくる弟に手を振ると、シアンはにっこりと笑ってタオルを差し出した。

彼女は『私は良い家の者でもなんでもないので、皆さんと同じ草の上で結構ですよ』と言ったのだが、騎士たちはとんでもないと、その無骨な腕で木陰に敷物を敷き、彼女を姫のように迎えた。

デイスは姉の言葉に嬉しそうに笑って、姉の横に座ってタオルで顔を拭う。

「サンキュー。姉ちゃんが来てくれるとみんなも張り切るから助かるよ」

へへへ、と少し照れたように笑って、姉もそれに笑い返す。

普段は子供のような無邪気さを持ちながらも自立している青年、『デイス・ミストラル護衛隊長』が無防備に甘えている姿は、なん

となく見てはいけなようなもののような気もするが、やはりどこか微笑ましい。並ぶと顔のそっくりな2人が仲睦まじく話す様に、自然と騎士たちの顔も緩んだ。

彼らにとってデイスは立派な上司であると共に、自分の子と同じ、もしくは少し年上くらいの青年でもある。――中には、シアンの微笑みにだらしなく鼻の下を伸ばしただけの者もいたが。

「隊長、宜しければ自分の相手もしてくんないっすか？」

「あ、お前ずりーぞ！ 是非自分と！」

和やかな2人を眺め、しかし普段王子の護衛をしているデイスに稽古を付けてもらえる機会はそれほど多くもないので、騎士たちはこぞってデイスに相手を申し込んだ。

「ああ、いいぜ。順番な」

デイスは快くそう言うのと、姉に手を振ってから元気に試合場へ戻って行った。

「ふふ」

シアンは笑いを零し、手を振り返す。そしてそのままの笑顔で、

「元気ねえ……そう思いませんか？ クオードさん」と言った。

「……………」

突然話しかけられて、木の陰に隠れていたクオードはびっくりと肩を揺らす。少しの後、苦笑いを噛みつぶしたような顔で出てきたクオードは、シアンにどうも、と頭を下げた。

「――あの、とりあえずすみません……」

決してやましい気持からではないが、こそこそしていたことに後ろめたさを感じてか彼がそう謝ると、シアンはいえいえ、と首を振った。

「護衛してくださっていたんですね、ありがとうございます」

「――あの、俺がいることもその……例の先読みとやらで？」

クオードが顔を引きつらせて言うと、シアンはにっこりと

「いいえ、ただの勘です」

と答えた。

クオード・ラストはデイスのように天賦の才には恵まれなかったが、妻も子もいる、人としても、騎士としても多少は経験を積んできた男である。

一応気配は消していたのだけれど、と彼は自虐するように笑いを浮かべて、この年端もいかぬ魔術師に視線を遣った。

——年端もいかぬ、とはいっても、彼女には何故か少女、という雰囲気はないようにクオードには見える。どこからどうみても可憐で清楚なお嬢さんなのだが……どこか、侮れないものが見え隠れしているのである。

たしかに彼女が非凡なるあのデイス・ミストラルと血を分けた姉弟だというのも頷ける話だ。——とはいえ彼女の方は、どちらかと言うと自分の上司と似た空気を感ずるのだが。

「あの、このことはどうか……」

「ええ、秘密にしておきますね。内緒で護衛しているのに見つかったなんて彼にばれたら、アレですものね」

ふふふ、と笑う彼女の心の内は計り知れない。しかしクオードはとりあえずその言葉に、ほっと胸を撫で下ろすのだった。

4-1 姉上様とお手紙（後書き）

——お城、飛びだせなかった……。

あと、活動報告の方には書いたのですが、拍手にこのお城に勤めるメイドさんの殴り書いた日記を載せました。本当に殴り書きみたいなものですが、よろしければ是非！

4-2 姉上様とお手紙

「失礼します」

その日の夕、シアンの子供の部屋をノックしたのはまたしてもクオードだった。

「あらクオードさん、夜這いですか？」

にこっと笑うシアンに、クオードは顔を引きつらせる。

「――いえ、殺されるんで冗談でもやめてください……」

彼女を慕う騎士たちには物理的に、メイドたちには社会的に抹殺されそうだ。……デイス隊長は、どうだろうか。

――一番考えたくない……。

シアンは何も言わず、ふふ、と美しい笑みを漏らす。クオードも愛想笑いを浮かべ、しばらく無言で笑いあうという謎の時間が続いた。これが自分の妻や娘とならなんてことはないが、この少女だと思ふと異様な緊張が走る。何故他の騎士たちはあんなだらけた顔で彼女と接することが出来るのだろうか……。

クオードはいつの間にかやらし身に付いてしまったおかしい危険察知センサーを憎み、乾いた笑いを漏らした。

「それで、どうなさいましたか？」

「――ああ、はい」

自分がここになにをしに来ていたのか忘れかけていたクオードは、彼女の言葉で我に帰る。

「殿下から手紙を預かってきたんです」

こちらです、と差し込まれた封筒には、『シアン・ミストラル殿』と几帳面な字で書かれている。たしかにクリスヴィンの字だ。

「あら、殿下直々のお手紙だなんて光栄ですわ。でも、なんでクオードさんが？」

シアンは完璧な笑顔を浮かべてそう言った。

クオードは苦笑いを返し、

「いやー、なんか偶然通りかかったら頼まれまして……」

そう言って頭をかく。そんなことこっちが聞きたいですよ、とは言えない。出来ればあまりこの少女とは関わりたくないし、お偉い貴族様にへつらうのも面倒だ。王子殿下などもっての外、自分はごく平凡に、優しい妻と愛しい娘と暮らしていけたら満足であるというのに。

シアンはそうですか、と大して気にした風もなく言う、封を開いた。中の紙に目を走らせ……たしかに、今一瞬ではあるが、何か黒いものが彼女の笑みに浮き出たように見えたが……。

クオードは黙って彼女の顔から目を逸らす。知らぬが仏。

「――クオードさん、殿下にお返事をしたいのですけれど、頼んでもいいですか？」

いえ面倒事には関わりたくないんで、出来ればご自分で、と思いますが、クオードは無難に

「ええ、勿論ですよ……」

と笑う。30年世間の荒波に揉まれた経験は、確実に彼を蝕んでいた。

シアンはありがとうございます、と言ってから、さらさらと紙にペンを走らせた。

「ではこれを、お願いしますね」

そう言って彼女が差し出したのは、折りたたまれた小さな紙切れ。――仮にも王子殿下へのお返事に、こんな紙つきでいいんだろうか。

「あの、封筒とか……」

自分が言うのもなんですが、覗かれたら困りませんか、とクオードが問うが、シアンは

「いえ、平気です。大したことは書いてありませんし、なんなら覗いても結構ですよ？」

と笑う。

普通の者なら『あら、ちょっと気になるわ』などと思うかもしれ

ないが、彼にしてみれば厄介事の種は放っておいても雨粒のごとく降ってくるので、もちろん全力で回避だ。ここ数年でやけに上手くなってしまった愛想笑いで丁寧にお断りして、夜分失礼いたしましたと彼女の部屋を後にしたのであった。

「殿下、クオード・ラスト諜報員です。シアン様からお返事を預かって参りました」

「ああ、入れ」

いささか緊張しながら扉を開くと、王子殿下は大量の書類に囲まれひっきりなしにペンを動かしていた。

クリスヴィン・アレリックは大変優秀な王子であるし、その顔は美しいとしか言いようのないほどに整っているのだが、それも相まってか、基本的に表情の動かない彼は時折本当に人形のように思える。こうして動いているところを見ると、彼も同じ人間だったのかと思わず観察してしまう。

「こちらです」

クオードは迷った末に、小さな紙切れを王子に渡す。

王子殿下はそれを見て数秒眉を寄せたが、無言のままその切れ端を受け取った。クオードは内心冷や冷やものである。

王子殿下は紙きれを開き無表情のままそれを眺めてから、息を1つ吐いてまた仕事に取り掛かった。

「……………」

王子殿下の仕事を進める様子は、聞きしに勝る敏腕っぷりだ。クオードはそれを無言で眺めながら数分の間黙っていた。

「……………」

もしかするとあの書類をまたミストラル嬢に渡せ、などと言われるのだろうか。クオードとしては出来る限りお断りしたいところだが、王子殿下の頼みを無下にすることなど許されないだろう。デイスと同じく、いつてもちゃんと父と母に育てられた平民出身の彼は、いまいち権力と言うものが苦手なのだ。

むしろデイス・ミストラルが、何故あれほど堂々と振る舞い、殿下と親しげに話せるのかがまったくわからない。彼は孤児院の出だと聞いたが、そこでは上下関係について教えてくれなかったのだろうか。いや、しかし彼は実力があるし、王子殿下の護衛隊長、そして騎士団は実力主義なので敬うべき人間が少なく、必然的に殿下と話す機会が多いだけなのかもしれない。参謀長や騎士団長には碎けたものではあるがきちんと敬語を使っているし、なにより彼の振る舞いは無礼と言うより人懐こいのだ。剣の才のみならず、人に好かれるというのもまた彼の持った才能かもしれない。

そんなことを数分にわたり考えていた、というか考えているしかなかったクオードは、ついに痺れを切らして

「……………あの、殿下」

と大変申し訳なさそうに言った。

それを聞いた王子殿下は驚いたように——と言っても実際はそうは見えなかったが、ふいと顔を上げ、

「——ああ、まだいたのか。下がっていいぞ」

そう言ってまた仕事に取り掛かった。

「……………」

クオードは張り付いたような笑みを浮かべたままそこに立ちつくした。

「——ん、なんだ、まだ何かあるのか？」

王子殿下が再び顔を上げる。

「いえ、邪魔してすいませんでした、失礼します……」

俺は諜報、空気になるのが仕事なんだ、そう言い聞かせながら騎士寮に帰ったクオードの目には、美しい水が浮かんでいたという。

4-3 姉上様とお手紙

「お前な、正式な手紙の返事には正式な返答をだな……」

翌日、執務室を訪れたシアンを見るなり、クリスヴィンは眉を寄せた。王子殿下の書状の返信にあんな切れ端を寄越してくるなんて、彼女くらいしか……いや、デイスもやりそうだ。さすが姉弟である。「別に大したこと書いてないからいいじゃない」

それにあの人は中見ないわよ、とシアンが言うと、クリスヴィンはもう声を荒げるのも面倒なのか、頬杖を突いて淡々と仕事を進めながらシアンに声を返す。

「——そういう問題ではないが……まあいい。それで、何か問題があったか？」

昨日クリスヴィンが送ったのは、1月先におこなわれる舞踏会の招待状だった。こうして話すことになっていたので結局二度手間だが、男が女に書状を送るのは舞踏会の習わしなのである。

これからも城で務めるのなら、貴族との付き合いは避けて通れないし、かの先読みの魔女、しかも絶世の美女という噂に、貴族連中もかなり興味を持っているようだ。この機会に顔見せと、社交界デビューをしておいた方がいいのでは、などと熱く議論する議会を横目に、そんなことをわざわざ熱く討論するほどこの国の議会は暇だっただろうか……とクリスヴィンは何とも言えない気持ちになった。だがまあ確かに一理あると、こうして招待状を送ったのだ。

しかしそれに対するシアンの返事は、

『要相談。詳しくは明日』

というもの。

「たしかに貴族連中を相手にするのは楽しいとは言い難いが、お前なら上手くやれるだろう。不安はあるかもしれないが……非常に不本意だが、俺がエスコートすることになるだろうし、お前はただ愛想を振りまいていればいい。得意だろう？」

クリスマスヴィンが僅かに嫌味を含ませてそう言って、正装した自分がいつも通り完璧な笑顔を浮かべる彼女と仲睦まじく並ぶ姿を想像し、どこか諦めたような薄い笑みを浮かべる。

「まあそれはいいんだけど」

反論すらしなのか、と視線を上げると、珍しく煮え切らない表情をしたシアンがこちらを見ていた。

「――それって、舞踏会なのよね？」

「……は？」

舞踏を嗜むから舞踏会、当たり前のことだろう。

「……………」

「……………」

たっぷり5秒はその言葉の意味を噛み砕いてから、クリスマスヴィンは、もしか、と口を開いた。

「――まさかお前、踊れない……わけはないか……」

いやいやまさかな、と呟いたクリスマスヴィンの言葉に、シアンは、
「踊れるわけじゃない」

となんでもないので返した。

「……………何？」

――今何か、意外すぎる言葉が聴こえたような気がするが……。

よく意味がわかっていない様子でぽかーんとかちらを見つめるクリスマスヴィンに、『何びっくりしてるの？』とばかりにシアンは首を傾げた。

「まさか、全国民が優雅に舞踏会なんかしてるとでも？ 私は孤児院出身なのよ、町のお祭りの踊りとかならまだしも、舞踏会で踊るようなダンスなんて出来るわけじゃないじゃない」

純粹に、悪びれずシアンは言った。

「……………」

――そういえばこの女は、孤児院出身の、世の身分制度で言う平民の下っ端辺りに存在するのだった。この、貴族顔負けのオーラを放つ女が……。

——意外……というのはおかしいが、やはり意外すぎる。

「どうしたの？」

黙りこむクリスヴィンに、シアンが訝しげに尋ねた。

「い、いや、すまない……お前にも出来ないことがあるとは……。それにしてもそうか、踊れないのか……」

やけに神妙な面持ちでクリスヴィンは呟いた。

孤児院と言うのがどういうものかはよくわからないが、少しはデイスから話を聞いていた。楽しいこともあったが、もちろん辛いこと、特に金銭面に関しては大変だった、と。

気高く見える彼女も、たくさんの子供と共に枕を並べ、スープを奪い合い、ひもじい思いを噛み殺しながら生きてきたのだろうか。

「何言ってるのよ、当たり前でしょ？」

確かに、誰しも出来ないことの1つや2つあるはずなのだが。クリスヴィンは思わず、まじまじと彼女の顔を眺めた。

艶やかな金の睫に、深い海を詰め込んだようなエメラルドグリーンの瞳。その容貌は、まるで神話の世界から飛び出して来たようで。

「そうか……お前も一応人類だったのだな……」

「え？ 何言ってるの？」

「い、いや、何でもない」

不審人物を見るような視線を投げてくるシアンに気付かない振りをしながら、クリスヴィンは1人頷いた。

今までなら、『実は神でした！』などと言われても納得してしまいうようなほど違和感を持って見えていた彼女が、この時初めて少しの泥臭さを感じる、普通の人間に見えた。

「舞踏会まで一月か……まあ出来んことはないな。お前さえよければ教師を付けるが……」

まあ無理にとは言わないがな、とクリスヴィンが言うと、

「やるわ」

シアンは勝気な瞳ですぐにそう答えた。

「1月……いえ、1週間で完璧な舞踏会マスターになってやろうじ

やないの」

あの血の滲むような努力の日々を思えば、それくらい簡単なことよ、とシアンは唇を上げる。

彼女は確かに天才かもしれない。けれど、決してそれだけではないのだろう。いつも挑戦をためらわない、それこそが、彼女をここまで成りあがらせた理由なのかもしれない。

シアンがこんな風になったのは自分のせいでもあって、しかしもう彼女はそのことを気にしてはいないのだろう。死に物狂いで魔術を身につけ、王子を怒鳴り付け、しかし謝った次の日にはもう何でもないような顔で話しかけてくるような奴なのである。

「――不思議な、女だな、お前は……」

ぼんやりとシアンを見ながら、クリスヴィンは自然と唇が緩むのを感じた。女性というののもっとねちっこい生き物なのかと思っていたが――まあ確かに自分が謝るまでの彼女は十分にねちっこかったが、それでも10年以上ものの恨みを、彼女はもうどこかへやってしまったのだ。――今クリスヴィンがからかわれているのは、ただの悪戯なのである。……残念、と言うべきだろうか。

「……あなた、おかしなものでも食べたの？」

いきなり微笑み出したクリスヴィンに、シアンがこいつ一体どうしたんだ、というような、気味悪がるような目を向ける。

「馬鹿を言うな、うちの料理人は優秀だ。お前がおかしなものを入れない限りはな」

すぐに口元を引き締めいつもの様子に戻ったクリスヴィンに、ほっとしながら、クリスが毎日にこにこしていたら城中のみんなはひっくり返るんじゃないかしら、と想像して、シアンは背筋を凍らせ、それから

「あら、それじゃあ保証はできかねるわね」と笑った。

「おい、ふざけるな！」

クリスヴィンの煩い声にも、シアンは安心したように頷く。

「あー、そうそう、やっぱこれよねー」

「何の話だ！ お前な、そう言えばこの前もまた……」

しかし説教は面倒なので、はいはい、と適当に流しておくに限る。

「はーい、わかりまーした」

「お前な……」

クリスヴィンは半分諦めたように溜息を吐いて、頬杖を突いた。

「まあ、見てなさいよ。すぐに舞踏会マスターになってやるわ。…

…首洗って待ってなさい？」

にやりと笑う彼女を横目に、やはりこいつは面倒な女だな……と、クリスヴィンは溜息を吐いたのだった。

4-3 姉上様とお手紙（後書き）

というわけで、何故かいきなり王道に舞踏会です。しかしこの2人が王道に動いてくれるとは思わないので、一体どうなるやら……私にも全くわかりません／（^○^）／
読んでいただいておりますありがとうございました！

閑話3 善し悪しを決めるのは、いつも自分である。

「まあ、お美しい！ とてもよくお似合いですわ」

「本当に！ ああ、舞踏会の日が待ち遠しいわねえ」

そんな私たちの言葉に、シアン様は本当に美しい笑顔を浮かべて、ありがとうございます、と返して下さった。

1月後に行われる舞踏会、それに向けて私たち、衣裳係は今日もてんてこ舞いだ。しかもシアン様はこの舞踏会が社交界デビューということになるので、いつも以上に手を抜けない。

けれど、衣裳係にとって綺麗な人を着飾るというのは楽しみなこと。シアン様が城に来てから毎日のように、

『ああ、シアン様ったら本当にお美しいのねえ』

『殿下もちろん素敵でいらっしゃるけれど、あまり華美なのは好まれないし……それにやっぱり女性のお召し物って胸が躍るわよねー』

なんて会話を――つまり、シアン様を着せ替え人形にしたいくて堪らなかったみんなは、嬉々として衣裳を選んでいた。

そんなわけで興奮しっぱなしだったみんなは、あれもこれもとシアン様に着せてみようとする。私が止めなければいつまで続いていたかわからない。貴族の衣装というのは意外と着るのが大変だった。りするから疲れたはずだろうに、いえいえ、と笑ってくださるシアン様は心の広い方だなあと思う。

薄い金色のドレスは、着る人によっては下品な派手さになりかねないけれど、シアン様が着ると美しくも清楚で、凛と咲く花のようだった。衣裳係である私たちにとってお世辞はお手の物だけれど（何しろとんでもない格好を好むご令嬢や、どう頑張っても……という方もいるから）、今回ばかりはみんな心の底からの称賛を送った。

「どこか気になるところは御座いませんか？ わたくしなどは、もう1枚くらいベールを重ねてもより華やかでいいかと思うのですけれど」

「あらダメよ、シアン様の美しさに敵うには宝石の1つくらいないと」

「いいえ、ここはあえて、もっと大胆に背中を出して……」
騒ぎ出すみんなを眺めて、私はまったく、と溜息を吐く。

あれこれ注文を付けてくるご令嬢に疲れたのはわかるけれど、衣裳係がこんなにバラバラではシアン様も困ってしまうだろうに。

私がそう口に出そうとしたとき、シアン様がこちらに向かって微笑んだ。

「そうですね……その貴女の、ご意見を聞いてもいいですか？」
「――私、ですか？」

私が目を丸くして自分を指差すと、シアン様はにっこり頷いた。

――ええと……何故私なんだろう……。正直、私の提案する衣裳はご令嬢にはあんまり受けないのよねえ……。

けれど、そう、私だって衣裳係の端くれ。はじめは確かに不評だったけれど、伊達に年月を摘んではないのよ！

私は気合を入れ直して、ちょっと緊張しながら、シアン様の姿を上から下まで眺める。

「ええと……それでしたら、こちらはどうぞでしょう」

私は西の名産である、銀細工をシアン様に手渡す。決して華美ではないけれど、華奢な作りと小さな宝石が、奥ゆかしい美しさを醸し出している。

シアン様は手にとってそれを眺めて、
「綺麗ですね」

と微笑んだ。気に入ってもらえたのかしら。私は嬉しさで、更に言葉を出す。

「後は……舞踏会が初めてでいらっしゃるのなら、手袋があった方がいいかと。見知らぬ男性に触れられるのは、あまり気持ちの良

ものではないかもしれませんが……それと、靴はもう少し低くしましょうか？ それでは、長時間踊りにくいかと思うのですが」

舞踏会には、いろいろな人が来る。紳士的な人もいれば、もちろん変態野郎もいるのだ。それにシアン様は平民出身という噂だし、ヒールの高い靴はあまり履いたことがないだろう。元々背が低い方ではないし、もう少し低い靴の方が殿下と並ばれた時のバランスもいいと思うのだけれど。

私は言ってから、ほとんど衣裳に付いては触れていなかったことに気付いて、

「――シアン様の腰は細くていらっしゃるので、腰をもう少し詰めるのとよりいいかと。あと、髪は上げると、更に魅力が増すと思います。――以上です」

そう付け足して終わった。

数秒の後、

「地味……」

「地味ね……」

そんな声が、溜息と共に後ろから吐き出された。

「――うるさいわね、わかってるわよ……」

私は小声で後ろのみんなにそう返して、シアン様を恐る恐る見上げる。――やっぱり、ちょっと地味かしら……。

シアン様は私のことをじっと見て、それから微笑んだ。

「お名前を、教えていただいてもいいですか？」

その言葉に、私もみんなも固まる。なんだろうか、もしかして気に触りでもしたのかしら……。私はちょっとびくびくしながらも、

「マリです。マリ・ヴィア・イリスと申します」
と頭を垂れる。

「マリさんですね」

シアン様は1つ頷いて、

「――できればこれから、私の衣装は貴女にお願いしたいのですけれど、受けていただけますか？」

……今、なんて？

「まあ、地味かと思ったけれど……」

「うん、元がいい分映えるわね。さすがシアン様だわあ」

仮縫いの後、簡単に髪を上げたシアン様を見て、みんなはうっとり呟いた。

シアン様は元がいいから、素材が引き立つような格好の方が似合うと思ったんだけれど、大正解みたい。

「それにしてもマリ、やったわねえ！　大抜擢じゃない、羨ましいったらもう」

「まあこれからよ、がんばるわ」

私はそっけなく言いながらも、内心小躍りしてしまった。

「あの、1つお聞きしてもいいでしょうか」

「何故貴女にお願いしたかってことですか？」

みんなが戻った後、2人きりになったところ私が聞くと、シアン様も私の疑問をわかってらしたようだ。シアン様はにこっと笑うと、「マリさんが、とても気の利く方だからです。銀細工はとても素敵だったし……」

ああ、やっぱり気に入ってくださったんだ。あれは、私もお気に入りだったからちよっと嬉しい。

「それに私は平民の出なので、あまり華美なものは肌に合わなくて……実はこの靴も、ちよっと転んじやいそうだと思っていました。ク……殿下より背が高くなっても困りますしね」

ふふ、とちよっと悪戯っぽく笑う顔はとても可愛らしくて。

——メイドのみんなが、『シアン様親衛隊』なんて馬鹿げたもの作っているのも、ちよっと納得してしまった。

「改めて、お願いできますか、マリさん」

シアン様が微笑んで、首を傾げる。

私も笑みを浮かべて、

「勿論です。その代わり、どうか私のことはマリと呼んでください。敬語もいりません」

私が言うと、シアン様はあら、と目を見開いて、それから

「ええ、お願いね、マリ」

そう言って笑って下さった。

ああ、なるほど……。私も入りたくなってきたなあ、『シアン様親衛隊』……。

閑話3 善し悪しを決めるのは、いつも自分である。（後書き）

ねえさんが、謀らずも勢力を拡大していく1ページです……。ちなみにクリスの名誉のために言っておくと、彼の身長は普通です。シアンが女性にしてはちょっと高いです。たぶん162〜165くらいの間なのだと思います。

5-1 姉上様とお稽古

「はい、では少し休憩いたしましょうか」

「わかりました」

シアンは汗を拭い、ふう、と息を吐いた。

昨日から始まったダンスの稽古は、思ったよりもシアンにとって楽しいものだった。

普段は頭を使うことが多いが、彼女は元々活発で動いている方が好きだったので、音楽に合わせて身体を動かすというのはなかなか面白い。

このコルセットさえなければもう少し楽しめるんだけだなあ、と苦笑いして、シアンは近くの椅子に腰かけた。

「それにしてもシアン様は、飲みこみが良くていらっしやいますわね。元々姿勢もよろしいですから、見栄えもいいですし」

やわらかく口元に皺を刻んで、稽古をつけてくれていた女性が笑った。優しいけれど容赦はないと評判の彼女に褒められて、シアンは素直に顔をほころばせる。

「ありがとうございます。これからもしバシ扱いて下さいね」

「あら、まあまあ。わかりました、覚悟なさいますかね？」

悪戯っぽく笑うと、再びレッスンが開始される。

この国の舞踏会で踊られるのは、基本的にワルツが多い。まずは基礎的な姿勢と立ち方から始まり、徐々にステップの踏み方なども練習していく。

「そうそう。ワルツのリズムは三拍子ですけど、一は強く、二と三は弱く踏み出して下さい。音楽と一緒にすわね」

「はい」

シアンは音楽を聞くことは好きだったが、特に拍子など意識したこともなかった。慣れるまでに多少時間が掛かってしまったが、一度要領を得ると自然と身体が動く様になってくる。

「シアン様、ごめんなさいね」

数日後、レッスンに訪れたシアンを見るや否や、いつも朗らかに笑っていた女性は申し訳なさそうに頭を下げた。

「まあ、どうしたんですか？」

シアンが問うと、いえね、と眉をひそめる。

「今日からレッスンに付き合って下さるはずだった殿方が、足をくじいてしまったらしくて……代わりを探そうと思ったのだけれど、みなさんお忙しいみたいで、今日には間に合わなかったのよ。本当に申し訳ないわ」

女性が深々と頭を下げるのを見て、シアンはそうなんですか、と微笑む。

「いえ、そんなに謝らないでください。仕方ないことですし、私の方はどうとでもなりますので」

さすがに忙しいクリスヴィンに稽古を頼むのは気が引けるが、夜ならデイスが付き合ってくれるだろう。ただの騎士、ということになっていたので彼が踊れることを皆は知らないのだろうが、影武者として過ごしてきたデイスは、並大抵の貴族よりもほど舞踏会には詳しいのだ。

「そう言っていただけとありがたいわ。じゃあ、今日は軽くおさらいだけでもしましょうか」

「はい、お願いします」

そうシアンが答えた時だった。

コンコン、と、練習室の扉がノックされた。

「はい、どうぞ」

女性が応えようと、きい、と音を立てて扉が開き、失礼します、とボーイソプラノの声が中に入ってくる。

「すみません、お声が聴こえてしまったもので」

顔を覗かせたのは、華奢で可愛らしい顔立ちをした青年だった。

栗色の瞳と白い肌の綺麗で、どこことなく中性的な印象を受ける。

「あら、ロビンくん久しぶりね」

その顔を見て、シアンは顔をほころばせた。彼はその見た目とは裏腹に、デイスと同じ騎士団に所属している。そのためこれまで何度か顔を合わせたこともあり、2人はそれなりに親しかった。

シアンの言葉に、ご無沙汰しました、とロビンは首を傾げる。

その様はまるで無垢で愛らしい小鳥のようで、マダムキラーと呼ばれるのも頷けると、シアンはこっそり思ったのだった。

「よかったら、僕にお手伝いさせていただけませんか？」

「まあ、本当に！？　ありがとうございます、ロビンさん」

願ってもみない申し出に、女性は大喜びで頭を下げた。

「お願いね、ロビンくん」

気合い十分なシアンを見て、『お手柔らかにお願いしますね』とロビンは微笑んだ。

「いつ帰ってきたの？」

遠征しているって聞いたけれど、とシアンが言うと、

「つい昨日です。本当はもっと早く帰ってくる予定だったのですが、全く往生際の悪い方がいて困りましたよ。まあ、最後には全部暴いて、地べたを這いずらせてあげましたけれど」

ロビンは可愛い顔にそぐわぬセリフを吐いて、しかしシアンは気にする風もなく、『あらあら、ご苦労さま』などと返した。

ふわふわの髪とぱっちりした瞳、それに華奢な体躯の彼は、見た目通り決して力の強い方ではない。しかし頭を使うことに長けている彼は徐々にのし上がってきており、今や参謀として、若手ではデイスに次ぐ期待株であるという。

「それじゃあ、まずはゆっくり始めてみましょうか。ロビンさん、リードお願いできますかしら？」

女性が微笑んで尋ねると、お任せ下さい、とロビンは胸に手を当てて頷く。

参謀として平民と共に活躍しているが、元々名家のご子息でもある彼は、騎士団では珍しく貴族のたしなみを身に付けている。

「もう少し身体を預けて下さって大丈夫ですよ。踊りもコミュニケーションの一つだと思って、あまり気張らずに」

さすが場数を踏んできているだけあって、彼のリードは上手かった。慣れてくると一人で踊るより、むしろ楽に身体を動かせるような気がする。

「上手く踊るコツは、楽しむことですよ。舞踏会は面倒なこともたくさんありますが、楽しそうに笑う女性というのは、みな美しく見えるものです」

ロビンの言葉に、シアンは勝気に微笑んで、

「あら、それなら私の得意分野だわ」

そう言うと、くると綺麗にターンを決めて見せたのだった。

5-1 姉上様とお稽古（後書き）

年末年始にかけて忙しいので、しばらく更新停滞してしまうやもしれません。ごめんなさい（・ω・）

活動報告の方ではお知らせしたのですが、拍手を新しくしましたので、よろしかったらお暇の際にでも覗いてやってください。

読んでくださって、ありがとうございました！

5-2 姉上様とお稽古

「ロビンくん、ありがとね。おかげでなんとかかなりそうだわ」

稽古を終えてシアンが言うと、隣を歩くロビンはいえいえ、と微笑んだ。

「お上手でしたよ。あとは殿下に任せておけば大丈夫でしょう」

いくら女性に縁がなさそうな堅物オーラを纏っているようにと、一国の王子、そして顔立ち自体は整っていると来れば、さすがに女性のエスコートにも慣れているのだろう。

シアンは、優しく微笑みながら女性に手を差し伸べるクリスヴィンを想像して――すぐに、その虚像を消し去った。――気味が悪すぎる。

「殿下は舞踏会嫌いで滅多に出ようとしませんから、今回はご令嬢たちも張り切っておられるようですよ」

「え、そうなの？」

考えを読んだかのような言葉に、シアンは思わず聞き返す。舞踏会が嫌いそうなのは見た感じでなんとなくわかつてはいたが、あつさりに参加を決めていたように思えたのだが。

「ええ。進んで女性のエスコートをするなんて、初めてのことじゃないですかね？」

ロビンはにっこりと笑って、シアンを眺めた。

国の重役でありながら庶民であり、更にデイスの姉でもあるシアンを1人で舞踏会に出すのは、クリスヴィンにとっては不安でしかないだろう。彼のことだ、他意はないのだろうか……

「おや、荷が重いとお思いですか？」

ロビンは微笑んだままに、シアンにそう尋ねた。

確実に付いてくるであろう令嬢たちの嫉妬。更には元庶民というレッテル、魔術師への好奇の視線――そんなものが飛び交うであろう舞踏会は、決してきらきらとしたおとぎ話の世界とは違うのであ

ろう。

心の内を透かし見るようなロビンの視線を真っ向から受け、しかし、シアンは笑った。

「いいえ。——這い上がるのは、得意なのよ」

上から見下ろすよりもね、と付け加えたシアンを見て、ロビンは口元を和らげる。

「成程……納得です」

2人は不敵な視線を交わし合うと、ふっと笑いを漏らしたのだった。

「姉ちゃん、いらっしゃーい」

扉を開けると、今日は早く稽古が終わったのだろうか、珍しく着替えも終えたデイスがいた。

「今日はリンドール伯爵からだったよね。じゃ、まずおさらいな」

「はーい」

初対面なのだし知らなくともなるとかなるかもしれないが、舞踏会に来る人の名前と特徴くらいは知っていた方がいいだろう。そう思ったシアンは、城使えも長く、影武者として動いていたころの名残か貴族にも詳しいデイスに教えを請うた。本当ならクリスヴィンに頼めば一番確実かもしれないが、彼も多忙な人である。それにどちらかというともちろん弟の方がいいので、シアンは毎晩ここを訪れては貴族の名前を頭に叩き込むのだった。

「んーと、じゃあこの人は？」

「クロリエ男爵、穩健派、商売に特化」

「ん、せいかりーい」

こんな風に弟に何かを教わる日が来るとは。シアンは昔、先生にでもなったつもりで弟にいろいろなことを教えていたことを思い出し、懐かしさに目を細めた。

「よし、じゃあ復習おしまいな。えーっと……最初はこの人、キリ

エ伯爵。西の小さい町を統治してる人で、信望も厚い。穏健派。そこでこの人が、カルフリーア公爵」

「え？カリフラワー？」

「違う違う、カリフリ……あれ、俺もわからなくなっちゃった」

はは、とデイスは笑って、そしてでっぷりと太った男の絵を指した。

「名前はギャグみたいだけど、結構厄介な人だから気を付けて。俺の危険人物ランキングではかなり上位」

ちなみにこれ美化されてるけど、本物はもっと太いし顔ももうちょつと地味だよ、とデイスは付け足した。

「どういう風に厄介なの？」

シアンが言うと、デイスはうーん、と少し考えてから、

「まあ、平たく言うところエロい。それで過激派」

そう言って姉を見た。

「あら、本当に面倒そうね」

貴族は大きく分けて、過激派と穏健派があるのだという。

穏健派というのは今の政治に好意的で、特別なことがなければ注意することもない。

逆に過激派は貴族を厳しく取り締まる今のやり方に不満を抱いていて、今のところは大人しくしているが、その内に反乱を起こしてもおかしくない人たちのことなのだろう。

シアンは別に王族ではないが、城に仕える要人である以上、警戒はしておいた方がいいとクリスヴィンにも言われた。

「ほんとエロじじいだから、ベタベタされたりしたらすぐ逃げたね。俺は当日警備あるから一緒にはいれないけど、クリスならなんとかしてくれるから」

珍しく不安そうな顔をするデイスに、シアンは頷いた。

「わかった。カリフラワーには注意。セクハラには制裁を」

「ちげーって！逃げるの！相手にするのもダメ、わかった！？」

「えー」

「えーじゃありません」

シアンは唇を尖らせていたが、デイスが一步も引かないので諦めて、わかりました、と渋々返事をしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828y/>

姉上様の謀略

2012年1月12日21時55分発行